

---

# 真・恋姫†無双 ～乱世を駆ける鬼神～

零

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫†無双 ～乱世を駆ける鬼神～

### 【Nコード】

N6327L

### 【作者名】

零

### 【あらすじ】

裏世界最強の戦闘者、“鬼神”北郷一刀はある日、自分と同じくらしいの強さを持つ奇妙男と出会う。そしてそこから運命は捩子曲がり、誰も予測出来ない外史への扉が開かれた――

この物語は作者の妄想が多大に含まれています。主人公最強、ハーレム、御都合主義などの言葉が苦手な人は即刻戻るボタンを押すことを推奨します。上記の言葉が「よっしゃ！ カモンカモン！」という人は閲覧してくれるとうれしいです。

## 1話（前書き）

前作のネギまのストックも尽き、尚且つ受験で時間が取れないので、前に書いてあった恋姫を少しずつあげていこうと思います。

時間が取ればネギまも更新するので、そのところは心配する必要がないはずです。

## 1話

「これで終わりか……」

どこかの地下駐車場。

そこには一人の青年と倒れている大男が十数人いた。

「あつけないもんだ。これで裏世界で名の通っている者達とはな……」

呟き去っていかうとする青年。

そこに随分と高い声が聞こえてきた。その声はこんな薄汚い地下駐車場で聞けるようなものではない。

それこそどこかの歌手顔負けのような声だった。

「流石ですね……」

高い声の主は女性で、年齢は20歳〜20歳前半くらいの容姿で物凄い美貌の持ち主だった。

「こんな所に来たら危ないですよ？ クライアント」

「別にいいじゃない。それに危なくなったらあなたが守ってくれるんでしょ？ 裏世界最強の鬼神——北郷一刀さん？」

クライアントと呼ばれた女性はさも楽しそうに喋っている。

しかし一刀と呼ばれた青年は少し不服そうな顔をしていた。

「確かに今回の依頼の内容は『クライアントの護衛及びクライアントを狙っている敵対組織の殲滅』ですけど……。わざわざ来なくて

もいいじゃないですか」

「そう怒らないでよ。少しだけ鬼神と呼ばれる男の戦いを見たくな  
ったのよ」

「はあゝ……。で、ご感想は？」

しょうがないと相手をする一刀。

「圧巻の一言に尽きるわね。人間があそこまでどうやったら強くな  
れるか不思議でしょうがないわ……」

はあゝ、息をつき、少し興奮気味のクライアントと呼ばれた女性。  
それに対して俺は、

「まあ一般人からしたらそう見えるでしょうね……。俺は祖父や  
親父を見てきたんでそこまで強いと思ってませんけど……」

謙遜気味に答える一刀。

「何を言ってるのよ。あなたがあなたの父と祖父を超えたから、最  
強の鬼神と呼ばれているのでしょうか？」

なんで謙遜気味に言っているのかわからないと言っているクライ  
アント。

「確かに総合的な戦闘となると年齢の若い俺が親父や祖父に勝つのは  
当たり前です。けど、技術的な面で見ると俺は祖父はおるか親父の  
足元にすら及びませんよ」

当然のように答える一刀。

その顔は小さな子どもが将来の夢を語るかのように輝いていた。

「ふふっ、あなたはお父さんやおじいさんが好きなのね」

「ええ。親父や祖父は俺の誇りであり目標ですから」

それから少し話していると

「あら？ 電話だわ、少し出てもいいかしら？」

「ええ。俺のことはお構いなく」

そう言つと一刀はクライアントから少し距離を取った。

しかし何時奇襲が来てもいいように臨戦態勢だった。

5分ほど電話が続いていたが終わったようだ。

終わると同時に近づいて来たクライアントが、

「ごめんなさいね、今日はこれでお別れみたい。戻って来いつて催促の電話が来ちゃった」

苦笑しばから答えるクライアント。

本当はもう少し話をしていたいように見える。

「わかりました。ではホテルまで護衛しましょうか？」

「いえ、車を向かわせてくれるって言ってるから『依頼』はここまですでいいわ」

その言葉を聞くと一刀は、

「では『依頼』の方はこれで終了です。報酬の方は先方に伝えておいた口座に振り込んでください」

事務的な言い方になる一刀。

それを聞いてまた苦笑するクライアント。

「少し堅苦しいわね……まあ『依頼』を受けてくれてありがとう。次もまた『依頼』があつたら頼んでもいいかしら？」

「いいですよ、何かあつたらまた頼んでください」

ニコツとスマイルする一刀。

その笑みを受けて顔を赤くするクライアント。

「っ！　そ、それじゃ、さよならっ！」

少し小走りで去っていくクライアント——いや『依頼』が終了した時点でクライアントではない。

彼女とはもうただの他人となつてしまった

「なんで顔赤くなつてたんだろ？　風邪かな？」

こんなところで鈍感スキルを発動する一刀。

「まあ悩んでもわからないことはわからないか……。そんなことよりこんな場所からさっさと退散するかな」

呟くと颯爽と身を翻して去って行った。

「さて、家に帰ってきたわけだが……何かすることあつたかな？」

家に帰ってきてやることを探す俺。

家と言っても学生寮の一角なのだが……

「今は冬休みで学校は休みだし、クラブも休み。宿題はまだやらなくて大丈夫か……」

何もやることなく、手持ち無沙汰気味な一刀は「あっ」と声を出してやらないといけないことを思い出した。

「そういや久しぶりに『白夜』と『夜天』を使っただから手入れをしなくちゃいけなかったな」

そう呟くと俺は押し入れに入っている刀の手入れ道具を取りだし、二振りの愛刀も取り出した。

「それにしてもあんなに斬ったつてのにこの刀身の綺麗さは半端じゃないな……」

なんか斬ったとか物騒なことを言っているが別段人殺しをしたわけではない。

ただ少し相手を斬り、後は峰で気絶させただけである。

「それよりほんとこの二振りの刀は不思議だよなあ。柄、鍔、刀身が全部真っ白と柄が蒼で鍔、刀身が真っ黒な刀なんて見たことねえよな……」

自分の二振りの愛刀を手入れしながら呟く。

「これでよし」と

愛刀の手入れが終わり道具と刀を仕舞う。

手入れが終わりまた手持無沙汰になった一刀。

「ふわあ~~~~。そろそろ寝るか……」

欠伸が出たことにより寝ようとする。

しかしその時何かを思い出したような気がした。

「あれ？　そういやなんか及川と約束があつたっけ？　でもなかったかも……」

記憶が曖昧ではっきりしない。

「まあなんかあつたらアイツのほうから家に来るからいつか……」

実に楽観的な考えである。

「さて寝るか……誰もいないけど————おやすみ」

誰もいないのにおやすみと言って眠る一刀。

はつきり言って可哀想な子である。（可哀想言っな！）

トントントンと誰かが部屋の方に向かってくる。

（この気配は及川か……なら問題なしということでも睡眠を続けるか）

気配の主は知り合いで決して自分の命を獲るような輩ではないので

安心して情眠を貪ろうとする。

ガチャっという音を立てて及川という人物が俺の部屋に入ってくる。この時一刀はそのことを無視して情眠を貪っていた。

……………ろ……………

（ん？ 誰かが何か言ってる気が……………）

……………き……………ろ……………

（うつせえなあ、誰だよ……………せつかくの俺の休日潰す気か？）

さっき気配で自分の知り合いと確認したのにそのことすら忘れている。

やはり怠惰は人間の敵なのである。

……………起きろって言ってるやろー！ー！！

「うつせーっ！ 誰だよこんな時間に俺の家に来る馬鹿は！ー！」

目を擦りながら辺りを見渡す。

「やっと起きたんかい、かずピー……………」

「ん？ 及川か……………なんか用事か？ 用事がなくて俺を起こしたのなら死刑な」

起きてそうそう物騒なことという俺。

普段は言わないが及川相手だと言ってしまっただよなあ。

「あのなら……………かずピーは約束覚えとる？」

「約束？ 何かあったっけ？」

完全に約束を忘れている。

最低な人間だな。まあ相手が及川だから別にいいや。

「かあゝ！ すっかり忘れとるんかいな……」

「忘れる以前に俺、お前と何か約束したっけ？ 正直お前との約束  
って俺に不利益だから極力しないようにしてんだが……」

またまた最低な人間性を出てきた。これも及川だからいいや。

「酷っ！！ それよりもや！ 冬休みに入る前に理事長から全校生徒  
に向けて宿題が出たやろうが！ これでも思いださんか！？」

「全校生徒への宿題？ ………………あー」

たっぷり一分くらいかけてようやく思いだした。

確か敷地内に歴史資料館を造ったから、休みの間に見学して感想を  
書けとかそんなやつだったかな？

「そっついや一緒に行こうぜって話をしてたっけ」

「やつと思いだしたんかい……。んでや。それを今日、まさに今から  
行こうやないか、と。そう思ったわけや」

「それで俺を呼びに来たのか……。あれ？ あの約束っていつ行くか  
決めてたっけ？」

一緒に行く約束はしたがいつ行くかの約束をしていないことを思い  
出した俺は及川に聞いてみる。

「いや、決まっていなかったで」

「決まっていなかったのに今日急に行くのかよっ！」

そう言いながらも俺は布団を片付けながら服を着替えてきた。

「なんで今日なんだ？ 何か用事でもあるのか？」

コイツの奇行はいつものことだが一応尋ねてみる。

「ま、ついでって奴？」

「ついでー？ なんのついでだよ？」

「で・え・と」 決まっとるやないかー」

「……………チッ」

最上級の笑みを浮かべる及川に対して舌打ちを打つ俺。

コイツいつペンしめたるか！

「ムフフッ！ てなワケでかずピー、早く飯食ってきてなー」

「はぁ……………わぁーったよ！」

幸せ一杯夢一杯なツレの笑みに、なんだが負けたような気がした俺は、吐き捨てるように返事をした後で及川に背を向けた。  
ついでに罵詈雑言も吐いておいた。

## 2話（前書き）

話の一段落するまで一気にいくぜ！

## 2話

歴史資料館へ向かう並木道には、俺達と同じような目的を持った学生が数人歩いていた。

皆やる気のなさそうな顔をしている。俺もだが（笑）

「そっぴやさ。今日は誰とデートなんだ？」

「ムフツ ♪ な・い・し・よ ♪」

あゝ、この態度むかつく。一回殴りてえ……

「内緒にする必要ないだろ。……あゝ、あの雨原ってコか？」

「グサツ！」

「それとも西条ってコから紹介してもらった、体操部の女の子か？」

「グサグサツ！」

「……なんだ違うのか」

なんでコイツはこんなに女の子と縁があるんだろう……

まあ長続きたためしはないけど。

「シクシク……んなもん、とっくの昔にフラレとるわーっ！」

あゝ、やっぱり。

「フラれたにしては、次の恋が早すぎだろ」

ほんとコイツの精神力だけは凄いと思う。

「当り前やないか。青春時代はたった三年しかないねんで！ ーに

恋あり！ 二に友情！ 三四と五にはセツ。スありや！」

「他の学生が通る道でんなことを大声で叫ぶな！」

他の学生の視線が突き刺さる……これで俺も及川と同じ変態と呼ばれたらどうしたらいいんだ……

「てかお前猿になりすぎだろ……」

「おうさ！ 猿さ！ 猿だともっ！」

はあ、やっぱりコイツは馬鹿だ。この性格のせいでフラれてるってことにまだ気づいてないよ……

「お前は少しくらい自制しろ」

「はあ？ 何言うとんねん、かずピーは。若い頃は猿やないと男やないねんで！」

「いや、それはないと思うが……」

てか誰だよ、若い頃は猿じゃないと男じゃないとか言ったやつ。出てこい、俺が一発ぶん殴ってやるから。

「ああ！ わかったでかずピー！」

「何が分かったんだよ」

ほんと急に何が分かったんだ？ 自分の人生の意味か？

「かずピーが俺にこないキツイこと言うんは、かずピーがモテへんからや！」

バキッ

「うるせえよ。しかも俺はモテないんじゃないやなくて断ってるだけだつ  
つうの」

そんな軽口を叩き合いながら歩いていて、及川がさっき叩かれたこ  
とを仕返しにと叩こうとするのを俺が勢いよく身体を捻って避けた  
とき――

俺たちを追い抜こうとしていた男子学生にぶつかってしまった。

「あ、わりい！」

「……………チッ」

その男子学生は舌打ちして去っていった。

「……………なんやあれ。感じ悪いのお」

「……………」

あいつ……………

「なんや？ かずピー、どないしたん？」

「えっ？」

「さっきのやつの中ジーンと見つめて……………ぬっ！？ もしやっ  
！？ かずピーってば、ウホッ！ なんかつ！？」

ドガッ

「痛っ！」

「ちげえよ！ 俺はただ……………」

「??？」

「……………いや、やっぱ良い」

あいつの身体、

俺は除くとして同年代にしたらありえないくらいがっちりとした筋肉がついていた――

なんて言ったら、休み明けに及川にどんなネタが流されるかわかったもんじゃない。

俺は『表』の世界じゃ普通に生きるんだ。

「それよりさっさと行こうぜ。お前だってあんまり時間がないんだろ？」

「おおっと！　せやせや、時間無いねんっ！　ほら、かずピー行くで！」

「へいへい」

俺は及川に急かされて資料館に入った。

「へえ〜っ！　また立派な資料館だな」

普通の一学校の資料館とは思えないほどの出来栄で、市町村が経営していると嘘を言ってもばれないほどの造りである。

「さすがフランチエスカと言うこっちゃな。どんだけ金かけとんねん」

「何億って掛かってるんじゃない？」

「やろうな。そのくせ俺らの授業料はそこまで高くないし。……裏で悪いことでもやってんとちゃうんか」

「悪いことって……例えばどんなだよ？」

ここにきてどうせまた馬鹿なことを言おうとする及川。  
ほんと学習能力のないやつだな。

「そやな。例えば、地下室に設置された調教ルームで、フランチエス力の女子生徒たちが夜な夜な調教され、資産家や悪徳政治家たちの餌食に……とか」

やっぱり……

「お前ってやっぱり馬鹿なんだな……」

「おまつ！？ ネタで言ったんをそんな辛辣なコメントで返さんでもいいやないか」

ネタでもそんなこと言っつなよ……

「はいはい。ほら静かに見て回るぞ。お前のせいで警備員が睨んできてやがる」

はあ、めちゃくちや睨まれてますよ。  
俺のせいじゃないのになあ。

「おーけいーほーけい。んじゃ適当に見てまわるか」

「……………」

「……………何よ？」

「いや。つまんねーこと言っつな、と」

「……………冷静にツツコまれると恥ずかしくなるから止めて……………」

俺は珍しく顔を赤くした及川と共に、陳列された古代の武具やら掛

け軸なんかを見て回る。

「これっていつの時代のモノなんだろうな？」

「パンフレットには後漢後期とかって書いてるで」

パフレットを見ながら答える及川。

そのパンフレットどこで貰ったんだよ、俺も見えてよ。

「後漢後期つーと、三国志の時代か。すげーな。1800年前ぐ  
らいの遺物かよ」

「……すげーな、かずピー」

「は？」

何を言ってるんだ、コイツ？

なんか凄いこと言ったか？

「三国志とか1800年前とか。よーそんな知識もつとつたなあ、  
自分」

「なんで？ こんなの常識だろ？」

こんなの小学生か中学生で習う常識問題じゃなかったっけ？

いくらゆとり世代って言ってもこのくらいはわからなかったらヤバ  
いような気がする。

「そんなもんが常識でたまるかい！ かずピーってもしかして歴史  
マニア？」

「……マニアって言い方が気に食わないが歴史は好きだぞ？ 田舎  
の爺ちゃん家にその手の本がめちゃくちゃあってさ」

「ガキの頃は休みのたびに遊びに行って、修行の合間に読みあさっ  
てたんだ」

それはもう倉庫の中が全部本で埋まってたくらいの量だったからなあ。

「かずピーの田舎ってどこやつけ？」

「鹿児島。…… っても、俺自身は生まれも育ちもこっちだけどな」

苦笑しながら答える。

「ほー。ってか、修行って何のよ？」

「剣術だよ。俺の家系は昔から道場をやっててな。俺もやってたんだ」

まあ俺の場合は『表』の剣術じゃなくて『裏』の剣術を習っていたんだがな。

「…… かずピー、ホンマに今の時代の人間か？ 修行とか剣術とか。なんかキモイわ」

「言うこと欠いてキモイってなんだよ。そんなに俺を怒らしたいのか？」

コイツ…… 人の大事なものを言うこと欠いてキモイって。コイツじやなきや半殺しにしてたところだな。

「いやいやマジで。現代の男子学生が修行とかって、マジでおかしい」

「別にいいじゃねえか。それに俺の爺ちゃんもオヤジも道場主の息子が弱いのは許せないって考えなんだよ。」

本当は俺に才能があり、それを開花させたいと爺ちゃんとオヤジが

頑張っていたんだけなんだが。

「……よーグレへんかったな、かずピー」

「まあ俺も爺ちゃんとオヤジを尊敬していて強くなりたいと思ってたからな。俺もそのことについてなんの不満も持ってない」

「んで、フランチエスカに来て剣道部に入って……そんなに強なつて何がしたいん？」

「何がしたいか」か………

ホント俺は何がしたいんだろ………

いくら悔やんでも強くなっても『アレ』はもう覆せない現実となつてしまったのに……………

「今の目標は不動さんに勝つことかな、それよりも後のことは……………」  
「後のことは？」

どうするんだろか……………

俺はこの世界で最強と呼ばれるほどもう強くなった……………

けど何も守れてやいない……………

本当に守りたかったものを守れなかった……………

「……………後のことはまだわかんねえや」  
「ほーか。ま、がんばりんさい」

励ますように俺の肩をポンポンと叩く及川。

コイツのこういう気配りだけは心の底から尊敬する。  
その後、及川が珍しいものを見つけたにあげるような声で、

「おろっ？ あいつ、さっきの奴ちゃうの？」

俺たちから少し離れた場所で展示物を見ている男子学生を指差す。

「お？ ホントだ。あいつもここが目当てだったんだな」

「理事長の強権発動で全校生徒の宿題になってもーたからなあ。…

けど、あんな奴、ウチの学校に居たっけ？」

「ん？ ……そっぴやそっぴだな」

聖フランチェスカ学園は元女子高で、つい最近になって共学になったから男子が極端に少ない。

一つのクラスに男子生徒が一人って割合だから、学年が違わない限り顔見知りなんだが……。

「見たことないな。一個下か？」

「あの威圧感で俺らより一個下？ ……末恐ろしいガキすぎやで、それ」

あの威圧感俺でさえ中々のものだと思うのだから、常人にしたら凄いものだろう。

「まあな。……………それにしてもあいつ……………」

「何よ？ はっ！？ やっぱりかすピーはウホッ！ やったんやつ！？」

またそのネタかよっ！

「違うつて。……あいつ、すげーぞ？」

「サラッと流さんといてや……。んで、すげーって何がすげーん？」

「なんつーか……隙が無いっていうか。立ち姿からでも結構な使い手っていうのが分かる」

俺でも素手で戦闘したら勝てるかは五分五分くらいだからな。まあ武器を持てば勝てるだろうけど……

「……キミどこの剣豪？ つか、なんでそんなん分かるねんっ！ かすピーおかしいで！？」

「いや。武道やってる人間なら、雰囲気とか立ち振る舞いとかで、そついうことってある程度分かるもんなんだよ」

「えー……絶対ウソや」

「マジだつて。……でも、あれだけの使い手なら、絶対に知ってるはずなんだけどなあ」

本当にあれだけの使い手なら俺が知っているはずだ。この学校に来た時は勿論、今年の新入生のチエックもちゃんとしたはずだ。それなのに俺はあんなやつ見たことがない。

「廊下ですれ違ったり、遠目に見たり。それだけでもある程度印象に残るものだし」

「あれぐらいイケメンやったら、俺も顔覚えてると思うねんけどなあ。……呪うために」

ふふふつ、と気持ちの悪い笑みを浮かべる及川に苦笑しながら、俺は男子生徒の方に注意を向ける。

「……………ここから……………じまる……………いかねえ……………」

ショーケースに展示されているものを食い入るように見つめながら、なにやらブツブツと呟いているようだ。

「（何か……………気になるな）」

もはや展示物に殺気を送るかのように視線を注いでいる。  
それがあからさまに怪しい。  
今にもガラス板を蹴破って、展示物をわし掴もうとするような――

「かずピー？」

「おっ？ あ、ああ。なんだ？」

さすがに見過ぎてたか。

「ボケーンとしてるけど、どしたん？ あいつに何か用でもあんの？」

「いや……………そういうワケじゃないんだけどな」

「ほんならさっさと見て回ろうや。もう時間もないねんし」

時間を気にしながら話す及川。

「そりやお前の都合だろ」

「もちっ！ 一人で待ってるあの子のためにも、俺は早くあの子に会いに行かねばなんのやーっ！」

「へいへい。……わあーったよ」

恋愛に年中する及川の熱気にあてられ、俺は肩を竦ませながら少年を意識の片隅においた。

それから俺と及川は、歴史資料館を隅々まで見て回った。

### 3話（前書き）

とりあえずこれでストップ。  
後は一日一更新で少しずついきたいと思っています。

### 3話

弾むような足取りでデートに向かう及川を見送ったあと、俺は一人で寮に向かっていた。

「しかし……あいつの妄想力もすげーな」

資料館に展示されている遺物を見るたび、この壺にはメンマが大量に入っていたのだ、この鎧は実は女の子が着ていて、それでエッチしていたのだ。

ありえねえっちゅうの。

「愛すべきバカだな」

そういう人間が友人に居るってのは、素直に嬉しいと思える。

『裏』の世界にはそんなバカはいなかったからな。

「それにしても……」

気に掛かるのはあの少年のことだ。

今まで学校内で見たことの無かった少年。

だが彼がフランチエスカの制服を着ていたのは、紛れもない事実。だからフランチエスカの学生では無いと、そう言い切れない。

「だけど……やっぱり気になるな」

展示物を見ていたあの目。

そしてあの身のこなし。

何かの武道をやっている人間ならば、立ち姿や身のこなしを見ただ

けで隙の無さが分かっただろうし、彼の強さとういのが透けて見えるはずだ。

その強さというのを感じれば、学校の中ですれ違っただけでも記憶に残るはず。

しかし俺にはそんな記憶はない。

（しかもあの威圧感……あれは『表』の世界の人間が出せるレベルのもんじゃない……………）

釈然としない思いが頭の中で微かに警鐘を鳴らすなか、俺は暗くなり始めた道を寮へと急いだ。

「……………寒い」

息が完全に真っ白になるほどの寒さの中、俺は愛刀の二振りを持って寮を出た。

「思いすごしなら良いんだがな……………」

正義の味方を気取るつもりはないけれど、一度思い立つと気になって仕方がない。

「この性格もどうにかしないといけないな」

苦笑しながら呟く。しかしこの性格が俺の象徴みたいなもんだと自分では思っている。

「何もなければいいんだけどな……………さて行くか」

一通り体を動かし、いつ敵が来てもいいように臨戦態勢を取りながら資料館へと向かった。

（けどこういう場合の俺の勘って結構当たるんだよなあ……………）

「やっぱり寒い……………」

風が露出している肌に当たるとチクチクするような寒さだ。

「こんな寒い中、何か気になるっていう曖昧な感覚に従って出歩くなんて、酔狂な奴だな、俺は……………」

出来れば何も無ければ良いんだが。  
しかしそんな望みも数十秒後に崩される。

……………ザサッ

「……………当たりか」

内心で舌打ちしながら前方からやって来るであろう人物を見極めようとする。

前方から来る人物が見えてきた——やはりあの時の  
男子生徒だった。

「……止まれ」

少し威圧しながら呟く。

しかし男子生徒は俺の威圧をまるで関係ないとも言わんばかりに無視する。

「……………」

立ち止った男子生徒は、資料館に展示されていた鏡のようなものを小脇に抱え、抑止した俺を威圧するように睨みつける。

(……なかなかの威圧感だな)

「誰だ貴様。俺に何のようだ？」

「何のようも何も。お前、その手に持っているやつはなんだ？」

「……………」

「どこから持ってきた？ それ以前にお前、この学園の生徒じゃないな？」

だいぶ威圧しているのにその威圧さえも無視する男子生徒。

このくらいの威圧を出せば一般人なら震えるか、下手すれば失神するほどの威圧感なんだがな。

(この威圧でさえも動じないか……厄介な相手だ)

「だからどうした？」

「お前……子供の頃言われなかったか？ 勝手に物を取ったら泥棒だって。これだからゆとり世代は——チッ！」

「……………チッ」

いきなり蹴りを放つ男子生徒。  
俺も難なくとは言い難いが避ける。

「お前……いきなり人を蹴ろうとするとは」

「……邪魔だよ、お前」

「お前、少しは人の話を――」

「聞く気は無い。死ね」

またもや繰り出される蹴り。今度は無造作に、しかし規則性があるような数多の蹴りが放たれた。

その一つ一つが雑草を刈る鎌――いや、人の魂を刈り取る死神の鎌のような鋭さで、俺の急所を的確に狙ってくる。

「チツ……………！」

いくら俺でもあの威力の蹴りをもらえば確実に骨は折れるだろう。だが俺もやられっぱなしってのは性に合わないので相手の重い蹴りを捌き、後方へ飛びさって男子生徒を距離を取る。

「なかなかやるな……………」

悪意に満ちた嵐のような蹴りを防いだ俺。  
そのことに男子生徒も驚いていた。

「チツ……しつこい！」

「しつこい、じゃねえんだよっ！ お前一体何者だ？ どうして盗みなんてしゃがるっ！？」

「盗み？ ……ああ、このことが」

そう言い鏡みたいな物を見せびらかす。

「これはお前らには必要ないものだ。必要の無いものを奪って何が悪い？」

「何？」

「それにこれは貴様には何の関係も無いものだろう？ だからさっさと失せて今日起こったことを全て忘れろ」

当り前のように言い放つ男子生徒。

「泥棒如きが偉そうなことを言うんじゃないよ！」

「あくまで邪魔をするのか？ ならば殺してやろう。……突端を開かせる鍵が無くなれば外史は生まれず、このまま終わることが出来るのだからな」

意味が分からないこと言う男子生徒。

「突端やら外史やらは何のことか分からないが……俺を殺せるものなら殺してみろ」

その瞬間俺の体から凄まじい殺気と威圧が噴き出る。これにはさすがの男子生徒も驚いた。

「なんだとっ!？」

男子生徒が驚いている最中に俺は持ってきた愛刀の二振りを腰に差し、抜刀した。

「二刀流か……おもしろい」

「はっ、そんな軽口を言えるのも今のうちだぜ？」

無言で数秒対峙した。そして風で枝が落ちたことによって二人とも動き始めた。

「うらぁーッ！」

四方から繰り出される打撃が、禍々しい風切り音と共に襲いかかってきた。

俺はそれを冷静に対処し相手の足を刀で斬りつけた。

ガキン

「なっ!?!」

これには俺も驚いた。

刀で相手の足を斬りつけたっていうのに相手の服しか斬れていなかったのだ。

「お前の足はどうなってるんだよ!」

斬り合いながら叫ぶ。

「本当なら教えないんだが………この世界の人間が何の迷いもなく刀で斬りつけてきたことに敬意を賞し教えてやろう!」

こちらも蹴りながら答える。

「人体には氣というものが通っているだろ？ その中に氣を扱う術で硬気功という技があるだろ！ それで体の一部を鋼鉄と同じように硬質化してるのさッ!」

回し蹴りを放つ男子生徒。それに対して俺は逆袈裟斬りで対応する。

「ありえないだろ！」

「はっ！　これがありえてるからこうして殺り合ってるんだろぅが！」

踵落としを繰り出すのに俺は二振りの刀を交差させ受け止める。

「……この俺が一瞬で決められない相手など何年ぶりだ？」

「俺だってそうだよ！」

「お前………名はなんという？」

「は？」

殺り合っている最中にいきなり聞いてきたので一瞬何を言っているのか理解出来なかった。

「それがどうした？」

「なに……ただ久しぶりにこんなに闘えるやつに出会ったんだ。少しくらい私情を挟んだっていいだろ？」

「………北郷一刀だ。お前の名は？」

「左慈………」

名乗り合いながら力比べをする二組。しかし均衡は破られた。

「北郷……自分と戦闘能力が拮抗している相手と殺しあった経験がないだろ」

「それがどうした！」

確かに俺は自分と戦闘能力が拮抗した相手と殺し合った経験なんてない。

だいたい『裏』の世界でさえ俺と同等のヤツなんていなかったのだから。

唯一いたのが俺の親父と祖父だが完全な殺し合いはしたことがない。

「経験不足だな……これで終わりだっ！」

「なっ!？」

予想していなかった左慈の拳の攻撃を上半身に食らい吹っ飛ぶ。

足技しか使ってこなかったから手は使わないものだと思っていた俺の失態だった。

「もう動けないだろ。この俺とここまで殺り合える人間がいるとはな……」

「ガハッ……………」

拳をともに食らい体が動かない。

「さらばだ——北郷一刀」

勝利の宣言をし、俺の命を刈り取ろうとする左慈。  
それを俺はスローモーションで見ていた。

俺はここで死ぬのか？

やり残したことであったかもしれない……

——私はもう駄目みたい

っ!!

――愛してたよ、一刀

俺がここで死んだら左慈が及川や不動先輩、俺の知り合いを殺すかもしれない……

――私がいなくなってもあなたはあなたでいてね？

俺はまた守れないのか？

——私との最後の約束だよ？

俺はアイツとの最後の約束さえも守れないのか？

ふざけんじゃねえ！

俺は何のために強くなった？

俺はもうあんな思いをしたくないから強くなったんだろ？

俺はもう誰もあんな思いをさせないために強くなったんだろ？

大切なものを守れるくらいの力を身に付けたんだろ？

ならちゃんと守ってみやがれ！

「……………ううおおおおおおお！」  
「なんだとっ!？」

絶対立ちあがれないものだと思っていた左慈は驚き、俺と距離を取った。

「驚いた……………あれを食らってなお立ちあがるとは……………」

その声には驚嘆の色が混じっていた。

「俺は守らなくちゃいけないものがあるんだ。だから負けられない！」

「ふんっ！ 死に損ないの体で何が出来る！」

確かに俺の体はもう死に損ないかもしれない……………だが！

「お前だけは絶対に倒す！」

「殺れるものならやってみろ！」

二人がまたぶつかり合い、刀と足を交差させていく。

「はっ！ こんな程度で俺に勝てるんでもいうのか!？」

三連弾の蹴りを刀で合わせて防ぐ。防いだ後、俺は『白夜』で袈裟斬り、『夜天』で一文字斬りをお見舞いする。  
それを左慈は足と拳で防ぐ。

「はあはあ」「はあはあ」

二人とも息が荒くなってきた。

（今が好機！）

息が上がってきているがそんなことを気にせず、ここで一気に攻めだす一刀。

「はあああああッ！ 煉塵二刀流、型の一『連衝』！」

右手の白夜を前に突き出し、左手の夜天を体の後方に引く。

（あれは突きの構えか？ なら！）

左慈は相手の次の行動を読み攻撃を合わせようとする。

「はあああああッ！」

左慈の予測通り左手に持っていた夜天での突きの攻撃だった。しかしこの後、左慈の予想を遥かに超えた攻撃が待っていた。なんと一刀は夜天で音速を繰り出した後、白夜を突いた反動を利用して体の後方へ持つて行っていたのだ。

そして――

「しっ！」

ザシュツと音がした。

それは一刀の白夜が左慈の肩に突き刺さった音だった。

「があああああッ！」

肩を突きさされ絶叫をあげる左慈。

それに対して一刀は白夜を左慈の肩から抜き、少し距離を取って次の型の準備をしていた。

「これで終わりだ、左慈！ 煉塵二刀流、型の六『瞬爪乱舞』！」

白夜を納刀し夜天の刃の先を自分の体の後方へ向けた。

「おらあああああッ！」

「俺だつて負けられないんだよおおおおおッ！」

白夜が音速の抜刀をし、その遠心力を使い夜天で一文字斬りを繰り出す。その後、さっきの遠心力と自分で体を回転させ白夜と夜天で逆袈裟斬り、最後に逆袈裟斬りの力で振り上げた二振りの刀で交差に兜割を放った。

この技は一刀が最も得意な技であり、左慈も全ては防ぎきれなかったようだ。

その証明として体の至るところから血が噴き出ている。

「これで終わ——パキッ、ん？」

何かが割れる音がし、その後すぐに夜ではありえないくらいの光量が一刀と左慈を襲った。

「なんだとっ!？」

満身創痍の左慈が慌てたようすで叫ぶ。

それは左慈が盗んだ鏡らしき物体から出ているようだった。さっきの連撃の時に当たり壊れたようだ。

「なんなんだ!？」

「北郷！ 貴様あああッ！」

満身創痍でここにそんな力があるのかわからないが一刀は吹き飛ばされた。

その時一刀の手から夜天が零れ落ちる。

「チィッ！ もう始りやがったか」

憎々しげに吐き捨てる少年の姿が、鏡から溢れだした光の中に飲み込まれていく。

光は徐々に広がりを見せ、さっき吹き飛ばされ動けない俺の方まで伸びてくる。

「なんだ！？ 何がどうなってるだ！？」

白くなっていく世界。

網膜を突き刺す白い光に対する未知なる感覚が、俺に瞼を閉じさせる。

「——っ！？」

得体の知れない感覚に、俺は戸惑った。

光から逃げるために身体を動かそうとするも、手足はまるで石像になっちょうにピクリとも動かない。

「無駄だ……………」

共に光に飲み込まれている左慈の声が聞こえてきた。

「もう戻れん。幕は開いた」

「何のことだ！？」

「飲み込まれる。それがお前に降る罰だ」

「どういう意味——っ！？」

「この世界の真実をその目で見るが良い——」

薄れていく意識の中——

左慈が呟いた意味ありげな言葉が、やけに耳に残り…………俺の記憶は

そこで途切れた――

〈異空間〉

「あら？」

ここは正史と外史を繋ぐ場所。ここで生きていられるのは神仙と呼ばれる者たちだけ。  
そんな空間に一人の青年が流れてきた。

「この子は……？　そういうこと……この子があの外史に行く子なのね」

少しずつ消えかかって行く一刀をみる謎の女性。

「あら？　この子怪我してるじゃない……しょうがないわね」

二、三言呟くと瞬く間に一刀の傷は塞がった。

これでよし、と思った謎の女性は辺りを見回した。  
すると一刀の白夜が目に入った。

「これは……この子がこれから向かう外史では少し役不足ね」

また二、三言呟くと今度は瓶に入った虹色の液体が出てきた。

「この液体を武器全部にかけてつと………こんなものかな」

謎の女性が虹色の液体を白夜にかけると、白夜は少しだけ光またもとに戻った。

「これで大丈夫ね……………そろそろ時間かな？」

このころになると一刀の体が物凄く光だした。

「頑張つてね、あの外史は一筋縄じゃないんだから……………」

そして一刀と白夜はこの異空間から去って行った。

「あなたの未来に多くの幸があらんことを——」

謎の女性は一刀の未来を案じていた。

## 4話

「……流れ星？ 不吉ね……」

こんな明るい時間の流れ星なんて珍しい……

「……様！ 出立の準備が整いました！」

「……？ どうかありませんでしたか？」

部下と思われる者達が、主君と思われる人物に問いかける。

「今、流れ星が見えたのよ」

「流れ星、ですか？ こんな昼間に」

「あまり吉兆とは思えませんね。出立を伸ばしましょうか？」

こんな時間の流れ星は不吉だと言って、出立を遅らせるかと問いかける部下達。

「吉と取るか凶と取るかは己次第でしょう。予定通り出立するわ」

「承知いたしました」

「総員、騎乗！ 騎乗っ！」

出立を宣言してからは迅速の対応だった。

ものの数分とかわらず出立の準備が整った。

「無知な悪党どもに奪われた貴重な遺産、何としても取り戻すわよ！ ……出撃！」

主君と思われる者の号令によって大群は進行を開始する。

それはこの世界の物語の始まりを告げるものでもあった。

「……………痛っ……………」

全身を包むわずかな痛みに思わず眉をしかめる。  
眉をしかめた後、周りを見渡すと――

「山ああああ!?!?」

ぼんやりしていた意識が、後頭部を鈍器で殴られたような衝撃と共に一気に覚醒する。

「は? なんだよ、これ。どこだここは!?!?」

遠くに見える山は明らかに日本の山じゃない。  
まるで中国の水墨画とかに出てくるような――

「ちょっと待てよ俺! 考えろ! 感じるじゃない、考えるんだ!」

ここは一発、深呼吸でもして気持ちを落ちつけようじゃないか。  
ついでに素数も数えるか?

「スーッ、ハアーツ、スーッ、ハアーツ……………」

胸一杯に空気を吸い込んで、ワザとらしく声を出して二酸化炭素を吐き出していく。

それを数度繰り返すうちに、動揺していた気持ちが徐々に落ち着いてきた。

「……よし」

ひとしきり深呼吸を繰り返したあと、冷静さを取り戻したという実感と共に周囲を見渡した。

「……………」

ただっ広い荒野は、今まで見たこともない山々を連れて地平線を形作っている。

フランチエス力学園のあちこちに植えられていたはずの常緑樹も、この場所には一切無かった。

（この時点でこの場所は日本じゃないな……。それに空気が澄み過ぎていて。こんな場所今の地球に存在していたか？）

さつきとは比べられないほど冷静に現状を理解しようとする。

「何か役に立つものは持っていなかったかな……」

ポケットを漁っても、大した物は出てこない。携帯にハンカチ、小銭が少々……………って、携帯！？

「これがあつたな」

携帯さえあれば現状の位置確認くらい衛星を媒介にして調べることができる。

俺の携帯は『仕事』の都合上最新機種を用意しなくちゃいけなかつ

たからその辺は問題ない。

「……………圏外か」

無常にもアンテナ表示の欄にはその二文字が写るだけ。

圏外のケータイなんて、ただのカメラかゲーム機じゃないか。

しかも心許ないことに、バッテリーは残り一本。

どうやら昨日の晩、充電するのを忘れていたらしい。

「昨日の晩……………？」

昨日と言えば朝に及川が資料館に行こうと誘いに来て一緒に行っただけだ。

確かその後

「左慈……………」

そうだ……。昨日の晩、資料館にいた男子生徒が気になって調べてみようと夜に出かけるとアイツに出会ったんだ。

「それでアイツと命がけの殺し合いをしている途中にアイツの持っていた鏡が割れたんだっとな」

あの時物凄い光が出ていたな。あれが原因か？

「……………」

正直この原因を断定するには情報が足らなさすぎる。

何か思い出せ。一番怪しいのは左慈と鏡だ。

それに関係すること……………」

「そういえば、左慈は光に飲み込まれる前に……………」

——もう戻れん。幕は開いた

——飲み込まれる。それがお前に降る罰だ

——この世界の真実をその目で見るが良い……

「あの言葉の意味はどういうことだ……………」？」

俺がこの原因について頭を悩ませているとガラの悪そうな男の声が聞こえた。

「おう兄ちゃん。珍しいモン持つてるじゃなえか」

「……………コスプレ？」

なんだ？ このコスプレ集団……………

頭に巻いてるのは黄色の巾着……………もしかして三国志の黄巾党のコスプレか？

えらく際どいところのキャラを持ってきたもんだ。

普通持つてくると言えば関羽やら張飛を持つてくるといつのに……………

……………

「……………はあ？ 何言つてんだ、こいつ」

「さあ？ あつしに聞かれても……………」

「おメエ、分かるか？」

「……………わがんね」

えーと、これはなんだ？

俺のほうがおかしいのか？

一応コイツらの顔を見るに東洋系の人物だっということはわかるんだが、いくら最近の日本のせいで世界がおかしい方向に力を注いでいるからって鎧とか普通通りを歩く格好じゃないよな？

俺はおかしくないよな？

「なあ、お前ら……」

「ああん？ 何だよ」

「ここ、どこだ？」

とりあえず人がいるようだから聞いてみよう。

場所がわからなければ現地の人間に聞くのが一番手っ取り早い手段だからな。

「……はあ？」

「それにその格好……映画かドラマの撮影か？ 随分と凝った作りになってるが……」

ついでにその格好について尋ねてみることにする。

あれがこの国の流行のファッションなら俺も見習わなくては……

…やっぱりやめとこう。

「……………？」

「アニキ。こいつ、頭おかしいんじゃないすか？」

「ああ。俺もそう思ってたところだ」

ああ？ 俺の頭がおかしいだと？

ぶん殴るぞ！

「言葉、通じているか……………？」

少し頬を引きつりながら聞く。

後少し暴言を吐かれたら本気で殴ってしまいそうだ。  
俺に暴言を吐いて殴られないやつあまりいないぞ？

「そりゃこつちが聞きたいぜ、兄ちゃん。俺達の言ってること、ちやんと分かるよな？」

「そりゃあな。ちゃんと通じていて良かったよ」

「そうかそうか。なら、良かったついでに……金、出してもらおうか」

は？ 金？

少し困惑している俺に対して黄色の頭巾を巻いた三人は鉄の塊を突き付けてきた。

「……どういうことだ？」

俺に向けているのは紛れもなく、人を殺すために設計された剣。  
しかもその剣には人を斬った時に付いたとされる血液が付着していた。

（なんで剣を人に向けている？）

銃刀法………違反？

いや、ここが海外なら、日本の法律は関係ないか……

「言葉は通じているんだよな？ ならテメエの持つてる金、全部置いていきな。ついでにそのキラキラした服と腰に差さっている白い剣もだ」

腰に差している剣？

そう思い、俺は自分の腰に目を向けてみると俺の愛刀の一振りである白夜が差されていた。

（なんで白夜が？ いや……あの時に持っていたから不思議じゃないか………なら夜天がないことにも説明がつかない………）

夜天はあの時、急にキレた左慈に弾き飛ばされ、光に包まれたときには持っていなかった。

（白夜の一振りしかないのは心許ないが………）

「はいそうですかって言うつもりだったのか？」

挑発を込めた声で相手に喋りかける。

案の定相手は怒りだして、

「調子乗ってんじゃないえ！」

小柄のチビがキレ、俺に向かって突撃してきた。

俺はそれを半歩横に移動してたやすく避ける。

横に移動するついでに足を出して引つ掻けることも忘れない。

「へぶっ！？」

良い感じに転倒するチビ。

それを見たリーダー格の男がデブに命令した。

「デブ！ やっちまえっ！」

「んだ」

明らかに食い過ぎで肥満体形のデブがのっしのっしと近づいてきた。

（さすがにあれば転ばせないか……なら！）

俺は転ばせないのならと、腰にある白夜に手を伸ばした。  
その瞬間――

「待てい！」

謎の人物がやってきた。

## 5 話

謎の人物の来訪により黄色頭巾の三人。

それをリーダー格の男がいち早く立ち直り問いただした。

俺の場合はいつでも攻撃が出来る準備をしながら謎の人物に目を向けていた。

（今が好機か……）

俺は一迅の風となりチビの後ろに回り込む。

そして白夜の峰で相手の首裏を打ち昏倒させる。

「だ、誰だっ！」

男が問いただした瞬間、デブの腹に柄の裏で突く。

デブは「ゴフツ」と言葉を発するとともに倒れ伏せた。

「たった一人の庶民相手に、三人掛かりで襲いかかるなどと……その所行、言語道断！」

威風堂々と答える謎の人物。

その謎の人物は女性だった。

そんな謎の女性に注目しているリーダー格の男を峰で頭を叩き昏倒させる。

（弱いな……）

そんなことを思いながら刀を納刀する俺。

「そんな外道の貴様らに名乗る名前な……ど………？」

全てを喋り切る前に倒してしまった俺。

謎の女性は槍を掲げてさっきの三人を倒そうとしていたが、すでに倒れている三人に顔を向け、そして俺のほうに顔を向けた。

『……………』

やつちゃった……………テヘッ

女的には俺を颯爽と助けるイメージでもあったのだろう。

それを証拠に彼女は女の身でありながら高い戦闘能力を持っていることが窺える。

それこそ俺の戦闘能力に届くくらいの――

それなのに俺は自分で敵を倒してしまった。そのため彼女もどうしていいのかわからないのだろう。

俺もわからないが……

そんな無音とともに時間が進みどうやって現状を打破しようかと考えていると相手の連れがやってきた。

(…………これで行かなくなったか)

内心で溜息をつきながら、次にどう行動をするか考える。

「星ちゃん」

「星殿ーっ！」

やってきた女性の連れはまたもや女性だった。

連れの一人は頭に人形？ を乗せていて不思議な感じの子で、もう

一人は眼鏡を掛け、とても真面目そうな感じの子だった。

「大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、俺のほうはなんともないよ」

人形を乗せたほうの女性——いや、まだ女性と呼ぶには早いから少女と呼ぶことにする。

その少女が俺の体を心配して尋ねてくれた。さっきの馬鹿三人とはえらい違いだ。

それよりもだ。またこんな変な格好かよ。

なんなんだ？ 本当にこれがこの国の流行なのか？

「星ちゃんも大丈夫ですか？」

ぼおっとしている星と呼ばれる女性を心配して少女は問いかける。

「あ、ああ、問題ない、風。というよりも私は何もしてないからな」

苦笑しながら答える女性。

ほんとすいません……

「何もしていないというと？」

「何、ただそこの御仁が自分で倒してしまったというだけさ」

「へえ」

関心したように目をむける眼鏡を掛けた女性。そのことに風と呼ばれた少女は、

「この人は強いんですか？ 星ちゃん」

「ああ。私と互角くらいの強さの持ち主だ」

（さすがだな……）

少ししか力を出していないのに俺の力量を理解するとは。  
やはり俺と同レベルの使い手か。

「星殿と互角っ！？ 何かの間違いじゃなくて？」

えらい酷い言われようだな………いや、違うか。  
あれは俺を貶めてるんじゃないやなく純粹に星と呼ばれた女性の力を知っているからこそ理解し難いものなんだろう。

「やりますね、お兄さん」

「お兄さん……？」

いきなりお兄さんなんて呼ばれるから焦る。

「お兄さんをお兄さんと読んで何か間違っても？」

「いや、そう言われると間違いはないかもしれないけど……」

何なんだ、この子は？

ペースが不思議すぎて掴めない。

「それよりもえつと……風、さん？」

「……ひへっ！？」

えええええ！？ 何か俺物凄く驚かれてるんですけど！  
俺何か悪いことしましたか！？

「貴様………っ！」

その瞬間。

突き付けられたのは、先程のチンピラを追散らそうとした女の子の、槍の穂先だった。

「なっ!？」

（なんで俺はこんな殺気を放たれてるんだ？ しかもこの人の槍の速度……速いな）

「御仁、どこの世間知らずの貴族かは知らんが……いくら御仁の武が強いからと言っていきなり人の真名を呼ぶなど、どういう見だ!」

「て……っ、訂正してください……っ!」

「何……？ さっき……… どういうことだ？」

「訂正なさい!」

「ううう………っ!」

何なんだ、この子たち……

名前一つ呼ぶだけでさっきまでとの様子が180°変わったぞ。

……… 真名？ 真名って何だ？

真名というのがイマイチわからないがこの国の風習か？

もし風習なら俺のほうに非があるか……… ならここは素直に謝るとしよう。

「……… すまない。訂正する。これは明らかに俺のほうに非がありそうだからな。本当にすまない………」

俺は誠心誠意に頭を下げる。

「……… 結構」

「はふう……………。いきなり真名で呼ぶなんて、びっくりしちゃいましたよ」

それはこっちの台詞なんだがな。  
内心で苦笑しながら呟く。

（しかし…………俺がいた世界に真名なんて習慣の国なんかあったか？  
一応『仕事』で世界各国回ったがそんな国一つもなかったんだが  
なあ）

「真名か…………なら俺は君達のこと何て呼べばいいんだ？」

とりあえず、真名というのは下手に呼んだら命の危険があるということとは覚えた。

というかこの風習、一見さんにはキツいだろ。  
誰が考えたんだよ、コンチクショー！

「そういえば名前を名乗ってなかったのですね。私は程立と呼んでください」

「私は今、戯志才と名乗っております」

程立ちゃんとはかくとして、なんかすげえ分かりやすい偽名の名乗り方されたな。

「私の名乗っている名前は偽名です」って言うてるようなもんじゃねえか。

「程立に、戯志才……………って」

確かそういう名前の人、昔居たような気がするんだが……………気のせい  
か？

「最後に私は趙雲と申します」

最後の人は趙雲さんか……… って趙雲！？

「えっと、もう一回名前を聞いてもいいかな？」

「ふむ、風で聞こえませんでしたかな？ ならばもう一度名乗りましょう。私の名前は趙雲と申します」

えー！ お前、趙雲ってあれだろ？ 三国志の中の蜀の劉備に仕えた五虎将の一人だろ？

本人？ そんな馬鹿なことがあってたまるか。あれは1800年も前の話だぞ。

しかもこの人女の子だし。史実じゃ男のはずだろ？

「どうしました？ 御仁」

「いや………ここは中国かその辺りの地域か？」

あるとすれば中国人の親が趙雲のように清く逞しくと願って名付けたんだろう。

そうとしか考えられない。

「ちゅうごく？ 星ちゃん、この辺りにそういう地名ってあるんですか？」

「いや、聞いたことがないな。御仁、その格好を見るに、どこかの貴族か豪族の一員のようなが………どこの出身だ？」

貴族や豪族？ 今の中国にそんな身分の人間っていたか？

「出身か？ 日本の東京だが………」

「にほんのとうきょう？　稟、そのような地名に心当たりはないか？」

「無いわね……。南方の国かもしれないけど」

日本を知らないだと？　この世界で米国に続く有名な国を知らないだと？

何かおかしいな……。嫌な予感がする。

「すまない、今の時代って……。後漢時代か？」

もし俺が予想している地名が出てきたのならば、嫌な予感的中してしまう。

絶対にありえない出来事なんだが――

「あたりまえですよ、それ以外何があるというのですか？　お兄さん」

……。予感が当たったか。

これで確信した。今は後漢時代で目の前にいるのがかの有名な趙子龍。

そして今から戦乱の世とされる三国時代の幕開けってか？

本題の俺はどういう理屈か知らんがタイムスリップしてしまったみたいだな。

左慈の言っていた罰ってのはこのことか？　何が罰かわからんが……

……。それより驚いたのが趙子龍が女の子だってことだな。

史実には男と書いてあったが……。もしやこれはパラレルワールドか？

普通じゃありえんがタイムスリップを見るに、もうなんでもありっぽいし……

「……………さん、お兄さん！」

「っ！？ ああ、どうした？」

危ない危ない。考えすぎて周りに余裕が出てなかったか。

「いや、急にだんまりになるもんですから少し心配を……………」

本当に心配そうに見上げてくる程立ちゃん。

そんな彼女の気を少しでも紛わせようと頭を撫でてみた。

「あつ……………」

「おっと、嫌だったか？ ゴメンな」

迂闊に女の子に触ったりしたらやっぱり駄目だったな。

「……………そういうわけじゃないのです」

「ん？」

何か程立ちゃんが小声で呟いたが小さすぎて聞き取れなかった。

まあ小さな声で言うことだし、そんなに大事なことじゃないだろう。

「（ほう……………あの風があんなに懐くとは）」

この光景を趙雲と戯志才は眺めていた。

そして趙雲がいきなり申し立ててきた。

「御仁、名前をそろそろ名乗ってくれませんか？」

「おお！ ゴメン、すっかり考え事をしていて名前を名乗るのが遅れたな。俺の名前は北郷一刀だ」

俺としたことが相手に名乗らせるだけ名乗らせて自分が名乗って  
なかったとは……………

「姓が北、名が郷で字は一刀ですか？ えらく珍しい名前ですが  
……………」

「違う違う。姓が北郷で名が一刀。俺には字がないんだよ」

苦笑しながら答える。俺は日本人だしなあ。

「これまた珍しい……………字がないなんて」  
「まあね」

「そういえば真名ってどういう意味なの？」

「北郷殿……………あなたもしや真名を知らないのですか？」

三人が驚いた様子で俺のほうを見てきた。

しかたないだろ？ 俺はこの世界に初めて来たんだから。

「ああ、なんせこの国に初めてきたからこちらの風習とかは何も知  
らないんだ」

一応違う世界から来ました、なんて言えないから違う国から来まし  
たって言うておくか。

「そうでしたか……………ならお教えましょう、風！」

「星ちゃん、私が説明するのですか？」

「うむ。私は口下手ゆえ説明が苦手だな」

クスクスと笑いながら程立ちちゃんに説明を頼んでいる趙雲。

俺が見るにあの人は絶対に口下手なタイプじゃないな。

「しょうがないですね。ではお兄さん良く聞いてくださいね。真名とは私達が持つ、本当の名前なのです。これは家族や親しき人にしか呼ぶことが許されない、神聖な名前なのです。そしてこれはその人の本質を包み込んだ名前、家族や親しき人以外は、例え知っていても口に出してはいけない本当の名前なのです。なるほど……」

簡潔に言うと、親しき人以外が呼ぶと即刻死刑になる名前だな。しかしそうなる……

「本当にさっきはすまなかったな、程立ちゃん  
もう一度誠心誠意頭を下げる俺。

「もういいですよ。さっきも謝ってもらったことですし……」  
「けど……」

「けども何もありませんよ、北郷殿。せつかくの相手の好意を無碍にしてしまうのですか？」

「……そうだな、戯才の言う通りだな。ならこう言うべきか……  
……ありがとう、程立ちゃん」

ニコツつと一撃必殺のスマイル繰り出す一刀。

これには程立ちゃんも顔が真っ赤になった。

しかし一刀は何で顔が赤くなったをわかっていない。

「（本当におもしろい方だ……）」

俺が名乗り終え、少し話をしていると趙雲の気の質が変わった。普段の状態から戦闘する前のような質の変化に。

「……………北郷殿、私と少し手合わせをしていただけませんか？」  
「どういうことだ？」

別段俺と趙雲が手合わせする理由がない。

確かにさつき程立ちちゃんの真名を呼んだがそのことについてはお咎めなしになった筈だ。

「私は誰よりも強くなりたい。武人なら誰だって思うことだろう？」

チツ……………趙雲はこういう人種かよ。

良い言い方をすればいつまでも高みを目指す者。

悪い言い方をすれば戦闘狂。

こういう人種は苦手だ。

何の迷いもなく、命を賭けることを恐れず、強者との戦闘を望む者。

（こういう人間は大概どこかで崩れ去る……………）

俺はそういう人間を『裏』の世界多く見てきた。

そしてほとんどの人間は崩れ去った。

自分より遥かに高い位置にいる人間に挑み、負け、そして崩れ去る。  
このことから立ち直れた人間なんて一握りの数しかない。

（けど、こいつは……………）

立ち直れるかはわからない……………けどどこでどうにかしておかない  
といつか崩れてしまうだろう。

（コイツは有望だ……………だからこそ俺はコイツが崩れるところなんて見たくない）

さっき見ず知らずの俺を助けようとした優しさはこんなところで失  
つてはいいものじゃない。

なら俺がやることは一つ。

ここで俺がアイツに負けるといふことを経験させ、そしてその挫折  
から立ち直らせること！

「いいだろう、趙雲。その勝負受けて立とう！」

## 6話

俺が答えて二人して距離を取る。

趙雲が槍を構え、俺も白夜を抜刀する。

（刀が一振りしかないのが痛いが……………まあ問題ないだろう）

左慈に飛ばされた夜天がないことに悔やむ。

しかし無い物ねだりをしても状況は覆らない。

「珍しい形の剣ですな……………それに色も珍しい……………」

「そういえばこの国には刀はないんだったな……………」

「ほう……………その剣の名前はかたなと言うのですな。しかしその細い刀身で私の『龍牙』の猛攻を塞ぎきることが出来ますかな!？」

先に趙雲が仕掛けてきた。

攻撃方法は突き。

しかしその突きは音速を超える速さで一刀を狙う。

一刀はその音速を超える突きを冷静に対処し受け流し、前へ進む。

「チィッ!」

「この程度か? 趙雲」

挑発しながら袈裟斬り、横一文字、逆袈裟の三連撃を繰り出す。

趙雲は龍牙を盾のように使いながら距離を取る。

距離を取ろうとした趙雲に追撃をかける。

これを趙雲は音速の突きで退けた。

「……………ここまで強いとは」

「そりゃどうも。俺としては趙雲が予想以上に弱いんだがな」

また趙雲を挑発する。

ここまで挑発されて完全に頭に血が上っている。

（安い挑発でここまで怒るとは………修行不足だな）

内心で思いながら斬撃を繰り出す。

この戦いは程立や戯志才から見れば互角の勝負に見えるだろう。

しかし現状は趙雲が挑発で頭に血が上り、一刀がそれを冷静に対処し攻撃を繰り出している。

どっちが有利なのかは誰の目から見ても明白だ。

「趙雲………確かにお前は強い。それこそ俺に追いつくくらいの強さを持っている。しかし俺には勝てないな」

「何い!?!」

鏑競り合いになった瞬間に趙雲に話しかける。

「どういうことだ!?!」

「どうこうも………確かにお前の武は強い………けどな、お前の武には形がないんだ」

俺は鏑競り合いを押しつけて横一文字で薙ぎ払う。

「形? どういう意味だ?」

攻撃をやめて俺の言葉に耳を傾ける趙雲。

観戦していた程立ちゃんや戯志才も俺の言葉に耳を傾ける。

「お前の武には形がない……………あるのがむしろに強くなろうとする意志だけだ……………」

そう、趙雲にあるのは強くなりたいという願望だけ……………

それじゃあ駄目だ。強くなった後、その武を何のために使うかを考えなかったら人は崩れ去る。

以前の俺のように……………

「その何が悪い！？ 強くなることの何が悪いというのだ！」

「なら聞こう、趙雲。お前は強さを求めた果てに何を成す！？」

「ぐつ。そ、それは……………」

「答えらないだろう？ だからお前は俺に勝てないのさ」

俺は最後の攻撃を仕掛ける準備として白夜を納刀する。

「お前は強さを求めた果てに何を成すか考えろ！ それを考え、心の芯となった時お前は強くなれるだろう」

腰を落とし白夜に手を掛け攻撃する準備が整った。

後は斬りつけるだけ……………

「北郷殿……………御仁の心の芯を尋ねてもよいか？」

「……………俺の心の芯か？」

「ああ。このやり取りで確信した。私では北郷殿には勝てないと……………」

「俺の心の芯を知りたいのなら……………諦めずにかかってこい！そして負けを体験しろ！そしてその体験を糧にしてもっと強くなってみせろ！」

今日一番の威圧を放つ。

その言葉を聞いた趙雲は顔をあげ、そして笑った。

その顔は何もかも諦めた顔ではなく、闘志が満ちたいい笑顔だった。

「そうですね……私としたことが少し弱気になっていたようです。  
では尋常に――」

「それでいい。これで最後だ――勝負！」

交錯は一瞬だった。

俺と趙雲は一気に近づきあい、最高の攻撃を放つ。

間合いの広い趙雲が俺の心臓を狙った光速に近い速度の突きを繰り返す。

俺はそれを体を地面に沈めるような体制で回避。

「なっ！？」

回避した俺がする行動は簡単だ。

趙雲が槍を手に戻す前に斬るだけ。

「煉塵一刀流、一の型『断』！」

俺は光速の居合いを抜き放つ。

その攻撃は趙雲の腹に吸い込まれ――

「さすがでしたな……………」

倒れながら喋りかける趙雲。

「大丈夫か？」

俺は手を貸し趙雲を起き上がらせる。

「大丈夫……………とは言い難いですな」

苦笑しながら立ち上がる。

「それにしても……………強いですな」

「まあこれが自分の心に芯を持っているか持っていないかの違いさ」

俺は少し照れながら答える。

「実際俺と趙雲にあまり武に差はない。けど——」

「心の芯の差が出ただけ……………ですか？」

悪戯が成功したときに浮かべる笑みを浮かべ、俺が喋っているとこ  
ろに割り込んでくる。

「そういうことさ」

「北郷殿……………改めて御仁の心の芯をたずねてもよいですか？」

そう言つと趙雲は真面目な顔をして尋ねた。

いつの間にか程立ちゃんや戯志才も近づいていた。

「俺の心の芯か……………」

あまり自分の心のことを話さない俺だが、今日くらいはいいだろう。  
これから趙雲が強くなるための出資と思えばな……………」

「俺の心の芯はな……………大切な人を何がなんでも守ること。二度  
と大切な人を奪わせないこと。これが俺が強くなった理由だ」

昔のことを少し思いだし、心に少し痛みが走る。

「俺は大切な人を守るためなら何だってやる……それこそ人を殺してでもな」

あの時の惨劇を少し思いだし気分が悪くなる。

「これが俺の心の芯。誰一人として崩せない俺の信条だ」

心の痛みや気分が悪いのさえ飲み込み力強く宣言する。

「それが御仁の強さの理由ですか……………」

この話を聞いた趙雲は何かを思案しているようだった。

「お兄さんは昔、悲しい思いをしたんですね……………」

少し悲しそうに問いかける程立ちゃん。

「昔な……………けど今は大丈夫だからそんな顔をしないでくれ」

悲しそうな程立ちゃんを撫でる。

そっぴや撫でたら嫌がられたような……………」

「ふふっ」

あれ笑ってる？さっき嫌がられたような気がしたんだが……………まあいつか。

「ふむ、完全に風に懷かれたようですね」

思案していた趙雲は考えが纏まったのか俺のほうへ顔が向いていた。

「懷かれたって……………」

「いやいや、私は風があんなに懐いている姿を見たことはありませんよ？　なあ稟？」

「ええ、私も驚いています」

二人してニヤニヤと…………

「かくいう私も北郷殿を気にいったわけだが……………」  
「はい？」

気にいった？　どういう意味だ？

「北郷殿、私の真名は星と申します。今後は星と呼んでください」  
「……………いいのか？」

真名とはとても大切な名前だった筈だ。

それを俺に許すとは……………確かに信頼されていると言えばうれし  
いんだが。

「いいですよ。あの武を見せつけられ、そして心の在り方を私に  
説いてくれました。それだけで私はあなたを信頼します。それに私は  
あなたに真名で呼んでほしいのです」

「そうか……………ならよろしくな、星」

「星ちゃんだけずるいのです。私の真名は風と言つのです」

「程立ちちゃんもいいのか？」

こちらも真名を覚えてくれた。  
なら俺がやるべきことは一つ。

「大丈夫ですよ。風はこれでも人を見る目は人一倍優れていると

思ってるのです」

「わかった。よろしくな、風」

「はいです」

「稟はどうするのだ？」

「私は――」

「そういえばお兄さんの真名を聞いてもよろしいですか？」

戯志才が何か言おうとしている間に割り込んで風は話かけてきた。  
俺の真名？　そっぴや俺には真名っていうものがないんだった。

「あー………そういえばな、俺には真名というものがないんだ。だから一刀つてのが俺の真名に当たるのかな？」

「「「！？！？！？」」「」」

あれ？　なんか物凄く驚かれてる………

やっぱり一刀が真名に当たるってのが驚いたのかな？

「北郷殿は見ず知らずの人間に真名を名乗っていたのですか？」

「まあそっちの風習に合わせたらそういうことになるんだろっとなあ」

俺の場合はそんなこと気にしないから別段問題ないし。

やっぱり俺とこの世界じゃ少し違うところがあるんだな。

「いやはや、器が大きいのか、それとただの馬鹿なのか………」

「馬鹿とは酷いな、星………」

軽口を叩き合いながら喋る俺と星。

そこにさっき風に喋っているのを妨害された戯志才が割り込んだ。

「北郷殿、私の真名は稟と言います。以後お見知りおきを」

「いいのか？ さっきまでは出し渋っていたけど……」

てつきり俺は信頼されていないものばかりと思っていたけど……

「まああなたが真名を名乗っていなかったら私も名乗らなかったのでしょうが…… そちらが名乗ってこちらが名乗らないというのは些か問題がありますし……」

「そんなこと気にしないのに……」

「いいですよ。だからこれからは稟と呼んでください、一刀殿」

一刀殿！？

「なあ、稟。一刀殿ってのはどうにかならないかな？ 何か気恥かしいんだけど……」

「別にいいじゃないですか、一刀殿」

「おい、星も悪ノリするなよっ」

二人してまたもやニヤニヤしながら俺をおちよくる。  
コイツら……

「風はお兄さんのことはお兄さんと呼びますねー」

「ああ、風は何も問題ないよ」

ああ良い子だなあ。

「あれは……」

星が何か見つけたようだ。

俺も星が見ているほうに目を向けてみると……旗？

「あれは陳留の刺史殿か？」

「そうですねー。大方さっきの盗賊の退治にでも来たんじゃないですかねー？」

「……………しし？」

刺史か？ 確か刺史っていうとこの時代の監察官みたいなものだったかな？

「あれは、曹の旗ですね」

稟が答える。

曹っていうと一番に思いつくのは魏の霸王、曹操か？

まあこんな所にいるわけないか。

それにしても圧巻だな。

あの騎馬武者の群れとかその上に翻る大きな旗とか……………

現代でやったら総製作費何百億とかの大作映画の撮影か何かみたいだな。

「ではこれでお別れですねー、お兄さん」

「行くのか？」

三人が旗が見えた瞬間から撤退の準備をしていたことを俺は知っていた。

「ええ。我々のような流れ者が一刀殿のような人となると、大概の者はよからぬ想像をしてしまうのですよ」

なるほど……………

ならここでお別れか。

「面倒事は楽しいが、官が絡むと途端に面白みがなくなるのにな」  
「そうか………せつかく仲良くなれたのにな」

仲良くなれた三人と別れを惜しむ俺。

「そうですね。私としても一刀殿とはもう少し一緒にいたかったですな」

「風もです」

「私もですね……」

そう言い振りかえる三人。

「また会えるか？」

問いかける俺。

そこには強い願望を含む声が含まれていた。

「どうでしょうか。今は戦乱の世。もし会ったとしても敵同士かも知れませんね」

苦い笑みを浮かべながら答える星。

同様に二人も同じ顔をしていた。

「そうか………出来れば次会うときも敵同士じゃなければいいんだけどな」

「私もそう思いますよ」

完全に出発の準備が整った三人。

「ではこれでお別れですな」

「また会いましょうね、お兄さん」

「一刀殿、お元気で」

口ぐちに別れの言葉を掛ける。

「ああ、お前らも元気でな。出来れば敵同士で会わないことを願っているよ」

俺も別れの言葉を掛ける。

「一刀殿……………」

「何だ？ 星」

別れの言葉を掛けたにもかかわらず俺に声を掛ける。

「私は今から大陸を風や稟たちと一緒に回ります。そしてそこで絶対に私だけの心の芯を見つけてみます」

星は自分の今の心情を語る。

俺や風たちは静かにその言葉を聞く。

「そして私が心の芯を見つけてもう一度あなたに出会った時……………手合わせをしていただけますかな？」

それは願望。

自分の心の在り方を見つけてもう一度勝負をしてほしいという願い。俺はそれを真っ向から受け止めた。

「ああ、お前が心の芯を見つけ俺にもう一度会った時……………その

勝負を受けよう」

俺も星が心の芯を見つけた後に闘ってみたいと心から思う。  
俺はそのために星に負けを体験させたのだから。

「ありがとうございます。ではこれで私たちこれで。後の事はここに来る刺史殿がどうかしてくださると思いますので……」

その言葉を言うと三人は駆け足で去って行った。

（いつかもう一度会おう。星、風、稟！）

俺はその思いを胸に秘め、これから来るであろう刺史を待ち構えていた。

## 7話

俺の周囲を取り囲むのは、騎馬の群れ。

俺、こんなにたくさん騎馬武者を生で見たの、生まれて初めてだよ……

戦車に乗った軍人なら見たことあるけど。

「華琳さま！ こやつは……」

その中でひと際目立つ三人が俺について話あっている。

（真ん中の女の子……なんて威圧感をしているんだ……あのランクの威圧感を見たことがない。それに左右の女性もかなりの戦闘能力を持っているな……）

俺は冷静に三人の女の子を分析していた。

「……どうやら違うようね。連中はもっと年かさの、中年男だと聞いたわ」

「どうしましょう。連中の一味の可能性もありますし、引っ立てましょうか？」

なんか俺を引っ立てるとか言ってるんだが……もしかして俺ってピンチ？

「そうね……。けれど、逃げる様子もないということは……連中とは関係ないのかしら？」

「我々に怯えているのでしょうか。そうに決まっています！」

なんだと？ 俺が怯えているだと？

確かにこの三人の威圧感と武は目を見張るものがある。

それは星と同じで俺と同等のように。

けれど俺はそんなことで怯えるか！

「怯えているというよりは、だんだんと睨んでいる目つきになってきているのだけれど……………」

おっと、顔に出ていたか……………」

俺はいつまでたっても感情制御が下手だな。それでもいつも座禅組んで修行しているんだけどあ……………」

「おい、その三人……………」

「……………何？」

とりあえず真ん中の少女の華琳っていうのが真名だったらヤバいの  
で、それと呼ばないように……………」

それよりなんか右にいる赤い服を着た女性がもの凄い勢いで俺を睨  
んできているんだが……………」

「お前ら……………誰だ？」

「無礼者！ 華琳様になんて口の聞き方だ！」

おおつと！？ なんで俺はこんなに怒られなくちゃならないんだよ。  
そこまで悪い言い方だったか……………？

……………結構酷い言い方だったかも。

「春蘭、控えなさい！ それよりそれはこちらの台詞よ。あなたこそ、何者？ 名を尋ねる前に、自分の名を名乗りなさい」

おっと、俺としたことが本日二度目の出来ごとになってしまった。  
うむう、やはりそれほど焦ってるのか？ 俺。

「俺の名前は北郷一刀。日本で、聖フランチェスカ学園で学生をしてる。日本人だ」

こう答えたはいいが、相手にとっては何を言っているのかわからないだろう。

ここは1800年前の三国時代なのだから。

「……………はあ？」

やっぱりの反応をありがとう。けどその頭がおかしい人でも見る目はやめてください。

「それよりここはどこなんだ？ いくら三国時代とわかってても地名まではわからないしなあ……………」

「貴様、何をふざけたことを言っている！ 生国を名乗れと言っておるだろうが！」

うわあ、案の定さつきから睨んでくる女性がキレ出したよ。

コッチとしては真面目に答えたつもりなんだけどあちらにとっては不真面目な対応に見えるんだろう。

「俺としては真面目に答えているつもりなんだが……………」

「姉者。そう威圧しては、答えられる者も答えられんぞ」

確かに凄い威圧感だ。けど左慈や俺の親父たちにはほど遠い……………  
そんなもので俺が怯えるんでも？

「ぐうう……………。し、しかし秋蘭！　こ奴が、盗賊の一味という可能性もあるのだぞ！　そうですね、華琳さまっ！」

おいおい……………このさつきからキレている女性、えらく真ん中の女の子ことを心酔してるな。

やはりコイツの威圧感——いや覇気とでも言うべきか？　それは人を惹くものを持っているんだな。

「そう？　私には、殺気の一つも感じさせないほどの手練れには見えないのだけれど。春蘭はどう？」

言ってくれるぜ。俺が出来るだけ穏便に事を進めたいから殺気やら威圧やらを出していないというのに……………

まあこの状態の俺の実力を見破れるやつなんか見たことないがな。

「……………それはまあ、確かに」

「北郷……………と言ったかしら？」

あら？　俺の話題が急に逸れたな。

「ん？　ああ」

「ここは陳留……………。そして私は、陳留で刺史をしている者」  
「お前が……………」

ほう……………やはりこの女の子がこの集団のトップだったか。  
まあ誰が見ても一目瞭然か。

「私のことを知っているの？」  
「いや、知らないな」

星たちから聞いたなんて言ったらアイツらに迷惑がかかるだろうか  
らここは知らないで通しておく。

「まあお前らが刺史殿で税金を集めたり、法律を決めたり、町の治安を乱す悪いヤツや怪しいヤツを、捕まえた処罰したりする仕事だ  
ってことぐらいならわかるぞ？」

「分かっているじゃない。なら、今の自分の立場も分かっているわよね？」

今の俺の立場？

服↓この世界では見られないポリエステルが使われた聖フランチェス  
ス力学園の制服。見るからに怪しい

場所↓さっきまでここにいた盗賊を見るにここに刺史殿たちが来た  
理由として一番確率が高いのは盗賊を捕まえるため。しかしその盗  
賊がいなくて、いるのが俺という明らかに「捕まえてください」と  
言っているような感じ。

俺↓お偉いさんに敬語などを使わずに話す。この時代ではそれだけ  
でも捕まる理由になってたような……………

結果↓捕まるんじゃない？ 俺。

「……………税金の未納はともかくとして、町の治安を乱した覚えはないんだが」

さつき出した結果を出来るだけ覆るように言い訳を放つ。

しかし相手はそんなことを聞き入れてはくれなかった。

「少なくとも、十分以上には怪しいわよ。春蘭。引っ立てなさい」  
「はっ！」

抵抗してもいいだがこれ以上事態を悪化させてはマズいと思い抵抗はしない。

殺されそうになったら速効で連中を叩き伏せるからいいか。

このままいけば街のほうに連れていってもらえるっぽいし。

「まだ連中の手掛かりもあるかもしれないわ。半数は辺りを搜索。残りは一時帰還するわよ」

そして俺は、待望の街に向かうことになった。

「なら、もう一度聞く。名前は？」  
「北郷一刀」

俺こと北郷一刀はさきほどの三人にどこかの宿に連れていかれてまともな尋問を受けていた。

「では北郷一刀。おぬしの生国は？」  
「日本」

ん、いつまでこの会話を続ければいいんだろう。もう30分は続いていて、いいかげんダルくなってきたし……

「……………この国に来た目的は？」

目的なあゝ……………来るつもりがなかった人間に目的とか聞かれても困るんだよなあ……………

「分からない」

こう答えるしかないよなあゝ。でもあの人達物凄く不服そうな顔してるし。

「……………ここまで、どうやって来た？」

どうやって来た、ねえ……………正直に話しても信じてもらえないだろうし……………

実際俺もそんなことを言われても信じれる訳ないし。

「前後の記憶がないから、それも分からない。気が付いたら、あの荒野にいた」

当たり障りのない言い方で言うしかないよなあ……………はあ。

「……………華琳さま」

「埒があかないわね。春蘭」

「はっ！ 拷問にでも掛けましょうか？」

拷問かあ……………さすがに逃げる準備をしながら喋るか。  
俺はいつでも逃げれる体制をとって女性達に話かける。

「まあ拷問されようが何されようが、今言つた以上の事は分からないし、知らないんだがな」

「本当に埒があかないわね」

ほんと俺もそう思うよ……………

「後は、こやつを持ち物ですが……………」

何時の間にか壊れた携帯とハンカチと小銭が少々。

「この菊の彫刻はなかなか見事なものね。これは、あなたが作つたの？」

「いや……………俺の国でのお金だ」

「お金？ その割には、見たこともない貨幣だけれど……………その日本という国は、どこにあるの？」

どこにあるか……………ここを中国として考えたら東の海を渡つたところか？

「だいたいここから東の海を渡つたところにあるのかな？ 今の時代だと」

「貴様あ……………っ！ こちらが下手に出ていれば、のらりくらりとワケの分からん事ばかり……………」

ええ！？ ちゃんと答えたのにこの仕打ち！？  
少し酷過ぎるだろ！？

「てかお前は下手に出てないだろ」

華麗にツツコミをかます俺。

予想以上に余裕があるな。

「なんだと、貴様あつ！」

「はあ……………春蘭。いい加減になさい」

「……………で、でもお」

すっげー。あの猪みたいな性格の女性をいともたやすく止めるとは。

「ああ、そういえば一つ聞きたいことがあるんだが……………」

「なに？」

「お前達の名前、教えてくれないか？ 呼べないから不便だし、今呼び合っているその名前……………多分真名なんだろう？」

今まで名前を聞いてなかった。ってか、荒野の時に名前を聞いたのにスルーされたしな。

「あら。知らない国から来た割には、真名のことは知っているのね？」

「まあな」

あまり星達のことを答えたくないなので適当に言葉を濁す。

「別に真名で呼んでもかまわないって言うなら呼ぶが……………駄目だろ？」

「当たり前だっ！ 貴様ごときが華琳様の真名を呼んでみる……………。その瞬間、貴様の胴と首は離れているものと思えっ！」

別に呼んだりしないからその剣を下せよ……

「だからな……。大体荒野の時も聞いたのに無視されたし……」

「そういえばそうね。私の名は曹孟徳。それから彼女達は、夏侯惇と夏侯淵よ」

曹孟徳と夏侯惇と夏侯淵ね  
——  
なんだとっ!?

「まさかと思つてはいたが………本当に魏の霸王、曹操とは……」

曹の旗を見た時とこの曹操と呼ばれた女の子の覇気を見た時に直感したが……  
本当に本物とはビックリだ。

「………どういうこと?」  
「………何がだ?」

何か間違いでもあったか?

「………どうしてあなたが、魏という名前を知っているの?」

どういうことだ? 曹操と言えば魏のはず………ああ、まだこの時では曹操は魏を建国してなかったんだな。

「どうして知っているか、か………何故と言われれば知っているからとしか答えられないな」

「貴様、華琳さまの名を呼び捨てにするでない！ しかも、魏だの何だの、意味不明なことばかり言いおって……………」

「春蘭。少し黙っていなさい」

「う……………は、はい……………」

さすが曹操というわけか。魏武の大剣を簡単に黙らすとは。まあ当たり前のことか。

「……………信じられないわ」

「……………華琳さま？」

「魏というのはね。私が考えていた国の名前の、候補の一つなのよ」

へえ、この時期には名前を考えていたんだな。

違う言い方をすればこの時期からもう野心があつたってことだよな、国の名前を考えているっていうことは。

「……………は？」

「どういう意味ですか……………」

「まだ春蘭や秋蘭には言っていないわ。近いうちに言つつもりだったのだけれど……………」

あれ？ でもこの場合俺つてめっちゃ怪しくないか？

曹操が考えている魏の名前を知っているっていうことは……………

それを、どうして会ったばかりのあなたが知っているの！ そして、私が名乗った曹孟徳ではなく、操という私の名を知っていた理由も

！ 全て説明なさい！

やっぱりいいいい！？

しかも俺がまたイージーミスしてるううう！

「まさかこ奴、五胡の妖術使いでは……………！」

「華琳さま！ お下がり下さい！ 魏という国の王となるべきお方が、妖術使いなどという怪しげな輩に近づいてはねりませぬ！」

魏っていきなり使ってるし！

しかも五胡ってなんだ？

あああの匈奴と似たような民族だっけ？

「そんなんじゃないよ！ 夏侯惇も剣を引け！」

少し威圧しながら答える。それにしびしび夏侯惇も従ってくれたようだ。

「（何？ 今の覇気……………春蘭よりも上！？）」

「（明らかに姉者よりも強い覇気を放ったぞ……………）」

「（なんだとっ！？ この私が華琳さま以外の覇気で怯えただど！？）」

三者三様の感想を漏らしているが一刀はまったく気づいていない。

「……………で、結局それは、どういう事なのだ？」

さっきの威圧感を気にして注意しながら話す夏侯淵。

（しくじったな……………むやみに威圧するんじゃないかった）

「簡潔に言つとだな……………信じられないかも知れないが俺は未来から来た人間だという事だ」

めちやくちや簡潔に話す。

まあ一回の説明じゃ信じて貰えないだろうから、そこは頑張って説明しますか。

「……………秋蘭、理解できた？」

「……………ある程度は。しかし、にわかには信じがたい話ですな」

やっぱりか……………まあある程度の常識を持っていたらこんな解答になるだろう。

「俺も全部信じてるわけじゃないが、そう考えないと辻褄が合わないことが多すぎるんだ」

まあ十中八九俺の解答で正解なんだろうがな。

けど、三国時代の時に真名という風習があったなんて聞いたことないし、それより曹操達が女の子なんてことも聞いたこともない……………ここが俺にも理解できないところか。

「……………ふむ」

「俺が持っている知識と照らし合わせてみると……………今この時代は漢王朝。今の皇帝は忘れたが一度新に滅ぼされかけて、そこから国を復興させた皇帝の名は光武帝……………合ってるか？」

「ええ。その辺りの知識はあるのね」

ふむ。俺が知っている三国時代の大体の知識は使えるってことだな。まあ少しくらい違うところもあるだろうが。

「こないだテストに出たばっかりだから……………」  
「……………てすと？」

この国ではそんな概念なかったっけ？

「試験のことだよ。学校の」

「……………学校？」

学校はなくてあったのは私塾だった、そっぴゃ。

「そっぴゃ……………みんなで集まって、いろんな勉強をするところ…

……………かな？」

「私塾のこと？」

「まあそんな感じ。……………日本はそれを個人じゃなく国が運営して、国民全員に義務として勉強させてるんだ」

「なるほど。最低限の学力を平均的に身に付けさせるためには、悪くない方法ね……………」

俺があゝ有名な曹孟徳に政治の仕組みを教えているぞ。ビックリ（笑）

「それでだ……………さっき言っただ漢王朝の出来ごとっていうのは、俺の世界じゃ……………千年以上も昔の話なんだよ」

「……………ふむ」

「……………分かってない顔だ、そりゃ」

「……………文句あるか」

特に文句なんかないんだが、俺が優しく教えてやろう。

「……………例えばだ、夏侯惇」

「おう」

えらく素直だ。

「夏侯惇が、どこかワケの分からない場所に連れて行かれて、項羽や劉邦に会ったようなもんだ。後はまあ、太公望とか始皇帝とかかな」

「……………はあ？ 項羽や劉邦と言えばはるか昔の人物だぞ！ そんな昔の英傑に今の私ができるものか。何を馬鹿な例えを……………」

「そういう、馬鹿げてる状態なんだよ。今の俺が」

「……………な、なんと」

やっと分かったか……………中々手ごわい相手だった。

「確かに、それならば……………北郷が華琳さまの考えていた魏という国の名を知っていたことも、説明が付くだろうな」

「だが……………貴様はどうやってそんな技を成し遂げたのだ。それこそ、五胡の妖術ではないか」

「それがわからないさつきから言ってるだろ？ 多分何かに巻き込まれたんだろうが……………」

まああの光が原因でのが当たりだろう。

次に左慈と会った時に聞いてやろう。もちろん俺がボコボコにしてからだがな。

「……………南華老仙の言葉に、こんな話があるわ」

「あの人物か……………」

俺は偉人の言葉などは好きだから大抵の偉人の名前と言葉は知っている。

「南華老仙……………莊周が夢を見て蝶となり、蝶として大いに楽しんだあと、目が覚める。ただ、それが果たして莊周が夢で蝶になって

いたのか、蝶が夢を見て莊周になっていたのかは……誰にも証明できないの」

「胡蝶の夢……か」

「へえ……大した教養ね。それも学校とかいうやつのおかげかしら？」

「いや、これは俺が好きだから知っているだけだよ」

苦笑しながら答える。

「な、ならば華琳さまは、我々はこやつを見ている夢の登場人物だと仰せるのですか！」

「そうは言っていないわ。けれど私たちの世界に、一刀が迷い込んできたのは事実、と考えることも出来るということよ」

「は、はあ……」

アイツ、また分かってない顔だな……

「一刀が夢を介してこの世界に迷い込んだのか、こちらにいた一刀が夢の中で未来の話を学んできたのかは分からない。もちろん、私たちにもね」

「……要するに、どういうことです？」

「華琳さまにも分からないが、少なくともここに北郷がいる、という事だけは事実だ、という事だ」

簡潔に纏めてくれたな。これなら夏侯惇も――

「……………うむう？」

分かってなかったあああ！？

「それで分からないなら、諦める。華琳さまにもお分かりにならない事を姉者が理解しようとしても、知恵熱が出るだけだぞ」

何気に酷いな。

「むむむ……………」

「春蘭。色々難しいことを言っただけ……………この北郷一刀は、天の国から来た遣いなのだろうよ」

「天の国から来た遣い……………」？」

なんだそりゃ？ 俺はそんなこと名乗った覚えはないぞ？

「なんと……………。こんな風采の上がないヤツが、天の遣いなのですか？」

風采が上がらなくて悪かったな！

「何をいきなり言ってるんだ？」

しかも夏侯惇もそれで納得してるっぽいんですけど！

「五胡の妖術使いや、未来から来たなんていう突拍子もない話をするよりは、そう説明した方が分かりやすく済むのよ。そういう事であなただもこれから自分のことを説明するときは、天の国から来た、と、そう説明なさい」

なんかえらく親切だな。

「てかどっちも似たようなもんじゃねえの……………」？」

俺からしたら妖術だろうが天の何とかだろうが、うさんくさがけた違いなのは同じだろうに。

「あら。妖術使いと呼ばれて、兵に槍で突き殺される方がマシ？」

「たかだか一兵卒の兵なんか俺が突き殺されるかよ」

「へえ……………」

そう言うこつた。俺がそこらの兵に殺されるわけ——  
——しくじった！

「あなたはそんなに自分の武に自信を持ってるのね」

ミスッたな……………

「まあ華琳さま、その話は後で……………」

「そうね」

俺の話がスルーされたな。

これはこれで何か応えるものがあるんだけど。

「さて。大きな疑問が解決したところで、もっと現実的な話をして  
良いか？ 北郷」

「ええつと……………その南華老仙の古書を盗んだ盗賊の話だっけ？」

そいつらを追って、曹操たちはあの荒野を走ってたらしい。俺を見つけたのは、本当についてというか、たまたまだったわけだ。  
それが幸か不幸はわからないが。

「そうよ。あなた、そいつらの顔を見たのね」

「俺が会った三人で確かならね」

俺が気絶させた三人がその古書を盗んだらしい。その三人はというと、俺と星が手合わせしている時に気がついて逃げて行ったらしい。

「ちなみに俺が見たのは、首領格らしいヒゲのおっさんと、チビとデブの大男。ただし、連中の名前までは聞いてない」

「……………少なくとも、聞いている情報と外見は一致するわね。……………顔を見れば、見分けはつくかしら？」

「特徴的な三人だったからなあ」。多分、顔や格好を見れば、すぐ分かるだろうと思う」

なんせ俺に喧嘩を売ってきた三人だったし。

「そう。……………なら私たちの捜査に協力なさい」

いきなり命令かよ……………

まあコツチの提案を聞いてくれるのなら別にいいけど。

「ならコツチからも一つお願いがあるんだが……………」

「何かしら？」

「俺の衣食住を提供してくれないか？」

これが今の俺の一番の願い。

これがないと人間は生きていけないからなあ。

「貴様っ！ 華琳さまにそんなことを頼まず、無償で働かんかあ！」

「お前なあ……………俺はこの国に理由はわからないが今日来たんだぞ？ そんなヤツに無償で働けて鬼か？」

「何い！？ 私が鬼のように怖くて大猪のような馬鹿力だっ！？」

「そこまで言ってねえよ！」

激しく言い合っている俺と夏侯惇。  
そこに曹操の仲裁が入った。

「春蘭、静かになさい。今は私が話しているのよ?」

「す、すみません……………」

しょんぼりしている夏侯惇。

目が合うと物凄く睨んできたけど。

「さすがに盗賊退治を手伝ってもらっただけじゃ衣食住の提供は出来ないわね」

「ならどうすればいいんだ?　っていうかもう決めてるんだろ?」

さつきから不敵に笑う曹操の顔が気になっていたが、そういう事だったか。

「なかなかやるわね……………私が出すもう一つの提案は――」

――私のもとで天の御使いと名乗りその未来の知識を使って私の覇業の手伝いをなさい!」

「やっぱりか……………」

どうせそんなことだろうと思った。

まあ俺としてはそれで済むのなら問題はない。

まあ一つ聞きたいことがあるからそれを聞いてから考えるんだが。

「答えは?」

「ひとつ聞き――」

俺もさっきの曹操のように不敵に微笑み返す。

しかしさっきまで黙っていた夏侯惇が割り込んできた。

「華琳さまっ！　こんなヤツを仲間に加えずとも我らだけで覇業を成し遂げれます！」

「そうかも知れないわね……………けどね春蘭、良く考えてみなさい。ここで一刀を我が陣営に引き入れることで天の御使いという風評を得ることが出来、それだけで私の覇業が一步前進するわ。それにここで一刀を逃して他の陣営に入られたら未来の知識を使って私の覇業の妨げになるかも知れないわ」

「ですが……………」

どうしても夏侯惇は俺が仲間になることは認めたくないようだ。けどそこまで必死になるんだ？

「なら春蘭。あなたはどうすれば一刀が私の臣下になることを認めれるのかしら？」

臣下って……………まあこの時代ならそう呼ぶかも知れないけど。

「それはもちろん、この夏侯元讓に一騎打ちで勝つことに決まっています！」

えらく自信満々に答えるな。

ならその自信、俺が打ち砕こうか。

「そんな簡単なことでいいのか？」

挑発しながら話しかける。

それについて曹操と夏侯淵はビックリした様子で主題の夏侯惇は怒りを顕わにした様子だった。

「なんだと？」

「だから言つたる？ お前くらいに勝つことは簡単だと……………」

その言葉を聞いた曹操は不敵に微笑み、

「わかつたわ。この試合で春蘭が勝てば一刀には無償で盗賊退治に協力してもらうわ。一刀が勝てば衣食住を提供する……………これでいいかしら？」

手合わせの勝ち負けで俺の未来が決まるってことか……………別に問題ないかな。

「俺はその条件でいいだろう」

「私も問題ありません」

二人の言葉を確認して曹操は外に出た。  
それに続いて夏侯淵、夏侯惇、俺という順番に外に出ていく。

「審判は私と秋蘭でするわ……………二人とも、決して相手を殺しては駄目よ？」

「当たり前だろ？」

「ふん！ 華琳さま、コイツが予想以上に弱かったらわかりません！」

ほんととんだだけコイツ俺の事が気に入らないんだよ……………

「（さつき出した覇気……………あれは春蘭さえもを超えていた……………どんな戦いを見してくれるのかしら？）」

「（姉者……………油断するなよ）」

二人の審判が見守る中、俺と夏侯惇の一騎打ちが始まるうとしていた。

## 8 話

夏侯惇は自分の武器『七星餓狼』を構え、俺も『白夜』を抜刀した。

「……………一刀、それで春蘭の攻撃を受け止められるの?」

夏侯淵も思ったのか曹操と二人してこちらを見ている。

夏侯惇の方は自信満々な様子で構えて待っている。

「心配するな……………まあ見てろよ」

俺も余裕綽々な態度で夏侯惇を見つめる。

「そう……………なら、始めっ!」

曹操の合図とともに夏侯惇が突っ込んでくる。

(速いなっ!)

予想以上に速い突進に驚きながらも相手の剣筋を見極める。  
夏侯惇も同じように見極め二人とも斬撃の嵐を繰り広げた。

「やるなっ、北郷!」

「そっちな、夏侯惇!」

鏖迫り合いをしながら話合う二人。

「それにしてもなんなんだ? その武器は。相手の攻撃を受け流し  
反撃する攻撃する技法なんかみたことなかったぞ!」

「これは俺の国の主流の戦い方なんだがなっ！」

俺が薙ぎ払い距離を空けた。

仕切り直しとなったところで、

「そろそろ俺も本気で行こうかつ！」

俺は殺気と威圧感を跳ね上げる。

「なんとっ！」

夏侯惇は俺の殺気と威圧感を受け少し後退する。

「（なんて覇気なの！？ あれは私や春蘭さえも超えているわ！）」

「（ここまでのものとは……………これは姉者が）」

「行くぜっ！」

大分距離が空いていたが数秒で詰める。

「らあっ！」

袈裟斬り、横一文字、逆袈裟、兜割などの斬撃を絶えず放つ。

それは嵐のように荒々しいのにどこか美しさも兼ね備えた斬撃だった。

「クソッ！」

そんな嵐のような斬撃に夏侯惇は防戦一方だった。

「（この私が負ける！？ 華琳さまが見ている目の前で負けるのか！？）」

斬撃をなんとかいなしながら考える。

「（どうしたら勝てる？ どうしたら……………）」

「左肩がお留守だぜ？ 煉塵一刀流、二の型『衝』！」

光速の突きが放たれる。

それはどんな達人でも反応出来るような速さではない。  
しかし――

「ぐう……………」

夏侯惇は野生の勘とも言えるものでぎりぎり防いだ。

防いだと言っても完璧ではなく、左肩を少し斬りつけられている。

「春蘭！」

「姉者！」

曹操と夏侯淵は叫ぶ。

「この勝負は一刀の勝ちでいいわよね？ 春蘭」

曹操は夏侯惇の傷を心配し、一刻も早く治療したいようだ。

「いえ……………私はまだ負けてはおりません！ 私は華琳さまの剣、  
どんなものにも負けない剣なのです！」

「姉者!？」

その言葉と同時に俺に目を向ける。  
その目は負けた時に発せられる眼光ではなく、これから相手を食らい尽そうとしている獣の目だった。

「良い目だな、夏侯惇……………」

「……………春蘭だ」

「「「!?!?!?!?」「」「」

三人が同時に驚く。

あの夏侯惇が俺に真名を許したのだから。

「いいの？ 春蘭」

「はい、構いません。こ奴の武は私も認めましたから……………」

照れくさそうに答える夏侯惇。

「そう……………なら私の真名もあなたに預けるわ、一刀」

「なら私も預けよう」

曹操と夏侯淵も真名を許してくれた。

「私の真名は華琳。これからは華琳と呼びなさい」

「私は秋蘭。これから秋蘭と呼んでくれ」

「分かった。華琳、春蘭、秋蘭……………これからよろしくな」

三人から真名を許してもらったところで一騎打ちが再会させる。

「傷のほうはもう大丈夫か？」

「ふん、この程度傷のうちに入らんわ」

ふっ、と笑う春蘭。

「そうか………なら、行くぜ!？」

「望むところだ!」

二人が同時に距離を詰めて斬撃を繰り出す。

春蘭は力重視の一撃必殺。

それに対して一刀は速さと技を駆使した連撃。

二人の剣劇はもはや一つの舞いに昇華されていた。

「(あの武………そして私や春蘭に対する胆力。何としても私のものにしたいわね)」

一刀を見てそんなことを思う華琳。  
そして、

「春蘭! この勝負絶対に勝ちなさい!」

「っ!？ はい、わかりましたっ!」

春蘭は華琳に応援されたことにより斬撃の速さと力強さが上がった。

(チィ! まだ上がってくるのかよ!?)

一刀も負けじと連撃の速度を上げていく。

その速さは前の斬撃が残像として残るほどだ。

「そろそろ決着を着けようか、春蘭………」

「そうだな………そろそろ決めてもいいころか」

二人は最後の攻撃をするために構える。

春蘭は自分が一番得意の人を殺す時に用いる構え。  
一刀は納刀し居合いの構え。

「それで本当にいいのか？ 北郷……………」

春蘭は一刀の構えを不審に思い尋ねる。

「ああ、気にするな……………」

「そうか……………」

二人の会話が途切れ、沈黙が流れる。

その静けさは心臓の音が聞こえそうなほどだった。

そして一迅の風が吹いた

「はあああああああッ！」

「うおおおおおおおッ！」

二人は一気に距離を詰める。

そして春蘭は渾身の兜割。

一刀は、

「煉塵一刀流、一の型『断』！」

二本の剣が交錯する。それは一瞬。しかしそれは無限とも思える時間とも言えた。

カランッ……………

「俺の勝ちだ、春蘭……………」

落ちた武器の音は春蘭の七星餓狼だった。

一刀は春蘭の首筋に刀を当て勝ちを宣言する。

「……………私の負け……………だな」

潔く負けを認める春蘭。

しかしその瞳には悔いが残っているようには見えなかった。

「勝者、北郷一刀！」

## 9 話

華琳が春蘭の肩の傷を手当しながら喋りかけてきた。

「一刀があんなに強いなんて驚いたわ」

「俺も春蘭が予想以上に強くて驚いたけどな」

俺に負けた春蘭はむう、とコチヲをジト目で見てくる。

「何？ それなら初めから春蘭に勝つつもりでいたの？」

「ああ。初めはもう少し簡単に勝てると思ってたんだが……………」

苦笑しながら答える。

「北郷！ 今度また戦うぞ！ 次こそ絶対勝ってやる」

「いつでも受けて立とう」

二人で熱くなっていると華琳が訪ねてきた。

「そういえば一刀、あなたの真名はなんていうの？」

「おお！ そういえば聞いてなかったな」

「私達が教えたんだ、もちろん教えてくれるよな？」

ジリジリと近づいてくる三人。

何かお前ら怖いよ！

「あ、ああ、言ってなかった。俺には真名がないんだよ」

「……は？」「……」

何言ってんの、コイツ？　みたいな目で見るのはやめろって言うるだろ？

「だから俺には真名っていうもんがねえの。正確に言うと俺のいた世界にはそんな風習がなかったな。まあそっちの風習に合わせるんなら一刀つてのが俺の真名に当たるのかな？」

「ではお前は初対面の私達に、いきなり真名を呼ばせることを許していたと……………そういう事か？」

「そういう事だな」

なんか少し前に似たようなやり取りをしたな。  
俺は内心で苦笑しながら答える。

「貴様は大物なのか大馬鹿者かよくわからんな」

「春蘭に馬鹿つて言われたくないな」

「何い！？」

春蘭をイジって遊ぶ俺。

そんなことをしている華琳が真剣な顔で聞いてきた。

「ねえ一刀……………あなた私のもとで働かない？」

「……………さっきの勝負にそんな条件はなかったはずだが？」

華琳が真剣になったので俺も春蘭で遊ぶのをやめ真剣な態度で対応する。

「さっきの勝負を見て私は思ったの……………私の覇業を達成するにはこの男が必要なのだと」

俺の目を見つめてくる華琳に少し見惚れた。  
しかし俺は心を冷静にし尋ねた。

「なんで俺が必要なんだ？ 武なら春蘭や秋蘭がいるだろ？」

「確かに二人の武は優秀よ？ けど二人だけじゃ私の覇業は達成出来ないの。それにあなたには天の知識があるし頭も良いのでしょう？」

「頭が良いかはわからんが………確かに天の知識は持つてるな」

俺は言うことは決まっているのに少し意地悪に相手も心情を聞いていく。

「だからお願い！ 私の覇業に力を貸して………」

「なっ!？」

「華琳さまっ!？」

春蘭と秋蘭は驚いていた。それもそのはず、初対面の俺でさえ自信の塊と思っていたあの華琳が俺に頭を下げて頼んできたのだ。命令じゃなくお願い。それはそれだけ俺のことを必要としている証拠だろう。

「……………華琳一つ尋ねてもいいか？」

「……………何？」

華琳は顔を上げ俺を見つめる。

華琳にも分かっているはずだ。この答えによって俺がどのような行動をとるかということ。

「華琳———いや曹孟徳よ！ その覇業とは何を成す!？」

「私の覇業……………それはこの世界を統一して民に安全で幸せな生活を送ることよ!」

俺の威圧感をものともせず威風堂々と答える。  
その答えに俺は昔のことを思い出してした。

——私はね、一刀。この『裏』世界と呼ばれている  
世界を安全で幸せな世界にしたいの

——どうやって？ やっぱり私が一番上に立つしか  
ないのかなあ

——  
ねえ、一刀は手伝ってくれる？

——  
私は途中でその重圧に耐えられないで潰れちゃうと思うんだ。

——  
だから一刀、私を支えてくれる？

「曹孟徳よ、その覇業の途中には悲しむ人達も出てくるだろう。それはどうするのだ!？」

「その悲しみは私が背負う！ 少しの人を犠牲にしてたくさんの人を救えるのなら、私はその少ない人の悲しみを背負って覇業を達成するわ！」

それは昔のアイツを見ているようだった。  
だれかが支えないと絶対に崩れてしまう。  
そんな茨の道を進もうとしている。

「本当にその修羅の道を行くのか？」

「くだいわよ！ 私は絶対にこの道を進んで見せる！」

なら俺が少しでも支えてやるか――

「お前の決意、しかと聞き遂げた！ ならこの俺も力を貸そう！」

俺は膝を着き白夜を抜刀し前に出す。

「この力、曹孟徳の覇業のために使つとここに誓つ。我は曹孟徳の覇業を妨げる者を全て斬り裂こう！」

臣下の儀礼を華琳に対して行う。

これが俺の答え。

その答えの華琳は満足そうに頷くと春蘭や秋蘭に声を掛けた。

「二人も手伝ってくれるわよね？」

「当たり前です、華琳さま」

「私の大剣が北郷と一緒に敵を打ち砕きましょう！」

二人も臣下の儀礼を取る。

「そう。なら行くわよ、我が覇業を成すために。春蘭、秋蘭、一刀！」

「はっ！」

「はい！」

「おう！」

ここから俺の物語が始まった。

ここからどんな物語が紡がれるかは俺は知らない。いや誰も知らないだろう。

けど俺は決めた。この修羅の覇業を成そうとしている女の子達を守ろうと。

今度こそ絶対に守ろうと――

「北郷一刀は魏に落ちましたか……………」

一人の男が水晶を覗いている。

「何をしている？ 于吉……………」

于吉と呼ばれた男性は振り返り自分呼んだ男性に尋ねた。

「帰ってきていたんですか、左慈」

「ああ……………それは北郷か？」

水晶に映る一刀を見て少し態度が変わる。  
それは好敵手に出会った時のような顔だった。

「ええ。北郷一刀は魏に落ちたようです」

「そうか……………」

そんな左慈を見つめながら于吉は聞いた。

「どうやって北郷一刀をこの外史から消滅させましょうか？」

「……………出来れば俺自身で殺したいんだがな」

「それは駄目でしょう？ それこそ狂ってしまいますよ？」

「分かっている！ けどな……………」

左慈は拳を握り水晶に叩きつける。その水晶はいとも簡単に砕け散った。

「あいつは人間の身でありながら俺と同等の力の持ち主なんだぞ？」

「そうですね……………左慈は神仙の中でも戦闘能力のなら五指に入りますからね」

「それなのにあいつは俺と同等だ……………」

苛立ちながら、それでいて楽しそうに語る左慈。

「まあとりあえずいろいろと仕掛けて……………もしそれでも殺しきれなかったらその時は『あの時間』で殺したらいいでしょう。『あの時間』なら狂いませんしね」

「そつだな……………それまで生きていろよ？ 北郷一刀！」

その言葉ともに二人は消え、その空間には誰もいなくなった。

## 10話

「……………何度見ても、壮観だなあ」

城壁の下を走りまわるのは、完全武装の兵士達。

束ねられた槍は薪のゆに積み上げられ、その隣には槍束を二回りは小さくした束がさらに大きな山を築いている。

弓兵隊の使う、矢だ。

武器に糧食、補充の矢玉。薬に防具に調理の鍋まで、戦に使う備品はその幅広さに事欠かない。

そして何より凄いのが、これら全てがセットやCGでも、小道具ですらない……………本物って事だろう。

「どうした、そんな間の抜けた顔をして」

「ん？ ただ、こんなにたくさん兵達を見るのは初めてだからな。少し感動したというか、驚いたというか……………」

何百人か、何千人か……………。ぱつと見て何人いるかさえ、今の俺の感覚じゃ見当もつかない。

「……………この程度でか？」

「そりゃ春蘭は見慣れてるだろうがな。……………俺達の国じゃ、こんな光景はありえないんだよ」

日本でこんな武装集団がいたらあつという間に世界各国に潰されるだろうしな。

「やれやれ……………。今からそのザマでは、いずれ華琳さまが一軍の将、一国の主になられたときは、驚いて死んでしまうのではないか

？」

「いやいや。流石にそれまでには慣れるだろ」

そんな無駄話を俺と春蘭がしていると後ろから声がかかった。  
その声は我が主様の声だった。

「……………何を無駄話をしているの、二人とも」

「か……………っ、華琳さま……………！これは、北郷が！」

「おいおい、春蘭。いくらなんでもそれは酷いだろ……………」

先に話しかけてきたのは春蘭だというのに。  
なんで俺が悪いみたいになるのかね？

「はあ……………春蘭。装備品と兵の確認の最終報告、受けてないわよ。  
数はちゃんと揃っているの？」

華琳もそんなに呆れるなよ……………

「は……………はいっ。全て滞りなく済んでおります！北郷に声をかけられたため、報告が遅れました！」

だ……から……、お前が先だろうが！

「……………その一刀には、糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるよう、言っておいたはずよね？」

「ああ。それな、さっき行こうとしたんだが急に春蘭が話しかけてくるもんだからまだ行けてないんだよ」

ほんと困るよな。

……………まあ確かに俺も少し忘れてたけど。

「んじゃ一走りしてくるわ!」

そう言い残しは俺は全力でダッシュする。  
なんたつて後ろから尋常じゃない殺気を出してる霸王様がいるからな。

下手したら死ぬじゃねえか……

「はぁ……。さて、春蘭? あなたに非があるようだけどそのところはどうかしらね?」

「えっ……。あの、その……」

「まあいいわ、今回は見逃してあげる。けど次からは無いようにしてね?」

「はい、華琳さま!」

馬具が置いてあるのは……。ここか。

「…………あれ」

今気付いたけど、俺、監督官の人の顔知らないぞ……………?  
だぁー! 来る前に秋蘭あたりに聞いておくべきだったな。

「いつまでダラダラやってやがる! 馬に蹴られて、山の向こうまで吹き飛ばされてえのか!」  
「は、はいっ!」

出撃前ってことで、どこもピリピリしてる。

精神修行がなってるってないな、タクツ…………。

…………どうせ聞くんなら、あんまりピリピリしてない人に聞か。そつ思い辺りを見回すと一人の少女を発見した。

「お、そこのお前」

「……………」

「おーい、聞こえてるか？」

「……………」

何故か物凄く無視されてるんだが。

俺なんかしたか？

「聞こえてないのか？　おーい！」

「聞こえているわよ！　さっきから何度も何度も……………いたい何のつもり！？」

いきなりキレられた！？

「聞こえてるんなら返事くらいしろよ……………」

ってか、この子も相当ピリピリしてるな。

声かける相手、間違ったか？

「アンタなんか用はないもので、そんなに呼びつけて、何がしたかったわけ？」

そりやお前からは用はないだろうな。

あるのは俺だし。

まあ一応話は聞いてくれそうになったから尋ねてみるか。

「糧食の再点検の帳簿を受け取りに来たんだが……監督官って人がどこにいるか知らないか？」

「何でアンタなんか、そんなことを教えてやらないといけないのよ」

だから何でそこまで邪見するんだよ！

初対面の人にコレはやりすぎだろ！？

流石に俺もキレるぞ！？

「……………何で、か。華琳に頼まれたからだけど」

「な……………っ！……………ちよつと、何でアンタみたいなヤツが、曹操さまの真名を呼んで……………っ！」

「ん？ そりゃ呼んでいいって言われたからに決まってるだろ？」

はあ……………それよりさっさと監督官から帳簿を貰って華琳のところに戻らないとな。

今ごろめちゃくちゃ怒ってんじゃないのか？

「そんなわけないでしょう！ 曹操さまのお耳に入ったら、アンタなんか叩き斬られるわよ！」

ほんとこの子なんなの？

もうめんどくさいなあ。他の人に聞いちまうか？

「斬られるわけないだろ。俺の方が華琳より強いし」

「！？ 信じられない……………なんで、こんな猿に……………」

「お前な……………初対面の相手に向かってメチャクチャ言い過ぎだろ」

俺って実はこの子とどっかであつた事があつたのか？

その時に恨まれるようなことをしたとか……………覚えがないな。

「あんた、このあいだ曹操さまに拾われた、天界から来たとかいう猿でしょ？ 猿の分際で曹操さまの真名を呼ぶなんて……………ありえないわ……………」

俺としてはお前の存在の方がありえないんだけど。

「どっちかっていうと、俺が華琳に覇業の手伝いをして欲しいって言うからここににいるんだけど」

「嘘おつしゃい！ そんなはずあるわけないでしょう！？」

「なら華琳に聞いてみれば？」

「そんな事も出来るわけないでしょう！？ 少しは考えなさい、この屑！」

あゝ、ほんとムカツイてきた。

やっべくな、このままだと殴りそうだわ。

「単刀直入に尋ねる。糧食の帳簿を監督官から受け取ってくるように、華琳から言われているからとっと教えてくれ」

「……………曹操さまに？ それを早く言いなさいよ！」

……………何度も言っただろうが。

はあ……………コイツ、根は悪い子じゃ……………ない……………のか？

「まあ、いいや。どこにいるの？」

「私よ」

「はいはい。……………で。どこにいるの？」

「だから私って言ってるの」

お前かよっ！

「お前が……………」

「悪い？ 何か文句ある？ 私がこの監督官をしている事で、あなたの人生に何か致命的な問題があるとも言いたいわけ？」

ここまでマシンガンのように言葉を放たれると最早呆れるより尊敬するよ。

「もしあるっていうのなら、そのところを倫理的に説明してみなさいよ。少しでも倫理が破綻してるなら嗤ってあげるからさ」

「しいて言えば、華琳に怒られるってことだけだな」

「大問題じゃない！」

そこまで大事か？

「そう言うなら早く、その再点検の帳簿つての、渡してくれるか？」

「……………その辺に置いてあるから、勝手の持つて行きなさい。草色の表紙が当ててあるわ」

勝手に！？ そんな適当でいいのかよ……………

「あ、そうかい……………」

その後、俺は帳簿を見つけた。

その帳簿に何故か興味を持った俺は帳簿を見る。

「……………」

「何？ 何か不都合な問題でもあったの？」

さっきの少女は俺を嗤いながら尋ねる。  
俺はそんなことは無視して真剣に聞く。

もしこの子がこれで帳簿が合っていると思ってるなら、即刻に監督官の任を追放しなくてはならない。

けど……………もし、この子が何かを考えそれを実行したということなら――

（コイツ……………）

「お前……………」

「だからどうしたのよ？」

「帳簿はこれで合ってるのか？」

「当り前じゃない。あなた馬鹿なの？」

少女は俺を嗤うがその表情には焦りが見られた。

（コイツは……………化ける！）

俺はこの子の評価を改めることにした。

下手すると首が飛ぶことだってあるかもしれないのに、それに怖気ないで実行する胆力。

そしてその智謀。

（コイツは華琳の覇業の一角を担える存在だ）

「お前の名前は何て言う？」

「何？ いきなり。私が答えるとも思ってるの？」

「もう一度聞く……………お前の名前は何て言うんだ？」

俺は体から殺気を出しながら答える。

本当はしたくないんだがこうでもしないとこの子は名前を覚えてくれないだろう。

「っ！……………荀文若よ！ 文句ある！？」  
「お前が……………」

俺の目の前にいるのが、あの霸王、曹操の覇業を手助けした王佐の才を持つ人物、荀文若らしい。  
確かにこの智には目を見張るものがあるから本物なんだろう。  
けど……………

（なんで皆女の子なんだ？）

これが今一番思う疑問だ。

史実なら男のはずの人間が全て女の子になっているこの世界。  
何かおかしいようでおかしくない。  
そんな曖昧さがある世界に俺は首をかしげる。

（まあ今はそんなことどうだっていいか……………）

俺は内心でそう決着を付け、さっきから睨んでくる荀文若に話しかける。

「俺はこれから華琳のところに戻るんだが……………お前も付いて来い」

「なんであんたの命令を聞かなくちゃいけないのよ！」  
「そんなの簡単だろ？ どうせもう一回呼ぶ羽目になるんだ。それなら先に連れて行く方が手っ取り早いだろ？」

俺は荀文若の策を見抜いた上でそう告げた。

荀文若の方も自分の策に気付かれたことに気付いたみたいだ。

「あなた……………何者？」

「……………俺はただの剣だよ。主の覇業を妨げる者を斬り裂くな……………」

## 11話

「華琳、遅くなったな。これが再点検の帳簿だ」

「待ちくたびれたわよ。早く見せなさい」

俺は荀文若から渡された？ 帳簿を華琳に渡す。

「……………」

案の定華琳は難しい顔をした。

（間違いなく華琳なら監督官の者を呼ぶようにって言うだろうな）

俺はそのことを見越して荀文若を柱の陰に隠している。

「……………秋蘭」

「はっ」

「この監督官というのは、一体何者なのかしら？」

よし、っと俺は心の中でガッツポーズを決める。

後は華琳が一言言っのを待つだけ。

「はい。先日、志願してきた新人です。仕事の手際が良かったので、今回の食料調達を任せてみたのですが……………何か問題でも？」

「ここに呼びなさい。大至急よ」

来た！

「その必要はないよ、華琳」

俺は呼び出そうとする華琳を遮る。

「その必要はないってどういことかしら？」

「俺がもう呼んでるってこと」

「はあ？」

俺は華琳にそう告げると荀文若を呼ぶ。

荀文若は柱から走り出して華琳のもとにやってくる。

「……………お前が食料の調達を？」

「はい。必要十分な量は、用意したつもりでしたが……………何か問題でもありましたでしょうか？」

いけしゃあしゃあとよく華琳の前で言えるなあ。

「必要十分って……………どういつもりかしら？ 指定した量の半

分しか準備出来てないじゃない！」

「……………」

俺は内心でほくそ笑みながら事の経緯を見守る。

いきなり殺されそうになったら守ってやるかな……………この子はこれから必要な人材だし。

「このまま出撃したら、糧食不足で生き倒れになる所だったわ。そうなったら、あなたはどうか責任をとるつもりかしら？」

「いえ。そうはならないはずです」

「何？ ………………どういう事？」

おお、あの華琳が困惑してるよ。

珍しい顔だな。

「理由は三つあります。お聞きいただけますか？」

「……………説明なさい。納得がいく理由なら、許してあげてもいいでしょう」

あの華琳だ。荀文若の理由で絶対に納得するだろう。

「……………ご納得いただければ、それは私の不能がいたす所。この場で我が首、刎ねていただいても結構にございます」

この子も流石の胆力だな。

さっきも俺の殺気に対して耐えていたし。

「……………一言はないぞ？」

「はっ。では、説明させていただきますが……………」

早速荀文若の説明が始まった。

この説明が終わった後の華琳の顔を考えると楽しそうで堪らないな。

「……………まず一つ目。曹操さまは慎重なお方ゆえ、必ずご自分の目で糧食の最終確認をなさいます。そこで問題があれば、こうして責任者と呼ぶはずです……………まあ今回はその男が先に私を呼んでいたのですが……………」

そう言いながら俺を睨んでくる。

そう怒るなよな。これでも時間短縮のためにやったんだぜ？

「ば……………っ！ 馬鹿にしているの！？ 春蘭！」

ちよっ！ 華琳キレるの早すぎだろ！？

「はっ！」

「はっ！ じゃねえよ、馬鹿！」

俺は春蘭の七星餓狼を奪い取る。

「華琳も後二つの理由が残ってるんだから最後まで聞けよ。判断するのは、それを聞いてからでも遅くないだろ？」

「北郷の言っ通りかと。それに華琳さま、先ほどのお約束は……」

華琳を宥めつつ春蘭に七星餓狼を返す。

俺と秋蘭の言葉で少し冷静になったのか、華琳は、

「……………そうだったわね。で、次は何？」

ふう、危なかったな。

もう少しで荀文若の首が刎ねられるところだった。

「次に二つ目。糧食が少なければ身軽になり、輸送部隊の行軍速度も上がります。よって、討伐行全体にかかる時間は、大幅に短縮できるでしょう」

「ん……………？ なあ、秋蘭」

「どうした姉者。そんな難しい顔をして」

春蘭がもの凄い顔で悩んでいる。

？ 何か荀文若の説明で分からない点でもあったのか？

「行軍速度が早くなっても、移動する時間が短くなるだけではないのか？ 討伐にかかる時間までは半分にはならない……………よな」

そこですか……  
糧食を無くしたら行軍にかかる時間が無くなるわけがあるはずない  
んだから当たり前だろう。

「ならないぞ」

「良かった。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ」

……………

ま、まあ気にしないでおこうか。

「まあいいわ。最後の理由、言ってみなさい」

これだ。俺がずっと待ち望んでいた言葉。

「はっ。三つ目ですが……私の提案する作戦を採れば、戦闘時間はさらに短くなるでしょう。よって、この糧食の量で十分だと判断しました」

キタキタ！

さあ言え！ 最後の言葉を！

「曹操さま！ どうかこの荀文若めを、曹操さまを勝利に導く軍師として、配下にお加え下さいませ！」

「な……………っ!？」

「何と……………」

「……………」

皆良い感じに驚いてるな。

「どうか！ どうか！ 曹操さま！」

「……………荀文若。あなたの真名は」

「桂花にございます」

ちよっ！ 真名ってそんな簡単に教えていいの！？

俺のときとか死闘を繰り広げて教えてもらったのに。

「桂花。あなた……………この曹操を試したわね？」

華琳の体から殺気と覇気が放出させる。

そのことに荀文若も体を強張らせながらも対峙する。

「はい」

「な……………っ！ 貴様、何をいけしゃあしやと……………。華琳さま！ このような無礼な輩、即刻首を刎ねてしましましょう！」

「あなたは黙っていなさい！ 私の命運を決めていいのは、曹操さまだけよ！」

「ぐ……………っ！ 貴様あ……………！」

やるなあ。あの春蘭にここまで言うなんて、並みの武芸者でも出  
来ないぞ。

ま、俺は春蘭を落ちつけさそうか。

「待て待て。落ち着け、春蘭……………」

「ぐう……………」

俺は春蘭を羽交い絞めにしながら荀文若から距離を取る。

「桂花。軍師としての経験は？」

「はつ。ここに来るまでは、南皮で軍師をしていました」

「……………そう」

華琳は何かを思案する顔になる。

そのことで事態が少し硬直したので俺は秋蘭に俺の知識がどれほど合っているものかを確認する。

「なあ秋蘭。南皮っていうと袁紹の本拠地だったよな？」

「そうだ。ついでに言うと、袁紹は華琳さまと昔からの腐れ縁でな……………」

何

故か秋蘭は袁紹の名前を出した瞬間に苦い顔をする。

何かコイツらの間にあったのか？

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったのでしょう」

思案は終わったのかまた事態が進んでいく。

それにしても袁紹の扱いが“あれ”って……………どんだけ酷い扱いなんだよ。

「それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「……………まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。まして使える主が天を取る器であるならば、その為に己の力を振るうこと、何を惜しみ、ためらいましょうや」

「……………ならばその力、私のために振るうことは惜しまない？」

だんだん華琳の顔が楽しいおもちゃを見つけた感じになってきている。

（後もう少しだな……………）

「一目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信しました。もし御不用とあらば、この荀文若、生きてこの場を去る気はありません。遠慮なく、この場でお切り捨ててくださいませ！」

「どうするんだ？」

俺は華琳に問いかける。

（どうせもう決めているんだろ？）

「……………」

「華琳さま」

「春蘭」

「はっ」

「華琳さま……………っ！」

華琳は秋蘭の言葉を聞く様子もなく、春蘭から受け取った大鎌を、ゆつくりと荀文若に突き付けた。

「桂花。私がこの世で尤も腹立たしく思うこと。それは他人に試されるということ。……………分かってるかしら？」

「はっ。そこをあえて試させていただきました」

「そう……………。ならば、こうする事もあなたの手のひらの上という事よね……………」

そう言うなり、華琳は振り上げた刃を一気に振り下ろし――

「……………」  
「……………」  
「……………」

少女は動かない。

しかし血は一滴も飛び散りはしなかった。

「それが答えか？ 華琳」

退いた刃の先に絡んだ淡い色の髪の毛は、荀文若の髪だろう。

ほんの少しでも荀文若が動いていたら、そのまま真つ二つになっ  
ていたんだろうが……………」

「最初から殺す気はなかったみたいだな」

華琳は俺の問いかけに笑って返す。

その返答もずっと前に予測していたことだが。

「当然でしょう。……………」けれど桂花。もし私が本当に振り下ろして  
いたら、どうするつもりだった？」

「それが天命と、受け入れておりました。天を取る器に看取られる  
なら、それを誇りこそすれ、恨むことなどございませぬ」

「……………」どっちにしろ俺は止めてただろうがな」

俺は苦笑する。

一応あり得ないことだと分かっているながら華琳を止めれる位置で何  
時でも準備していたのだ。

「……………」嘘は嫌いよ。本当の事を言いなさい」

「曹操さまのご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いないと思いましたので。避ける気など毛頭ありませんでした……………」それに私は軍師であって武官ではありません。あの状態から曹操さまの一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでした」

「そう……………」

小さく呟いた華琳が、荀文若に突き付けていた大鎌をゆっくり下す。

「……………ふふつ。あははははははっ！」

「か、華琳さま……………っ!？」

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその知某、気に入ったわ」

華琳はいつもでは見られないくらいの大笑いをした後に荀文若に告げる。

「あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にする。いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみなさい。糧食は半分で良いと言ったのだから……………もし不足したらその失態、身をもって償ってもらわよ？」

「御意！」

「これで一件落着か……………」

俺は一仕事終えた感じに呟きを漏らす。

その呟きをここぞとばかりに拾った華琳は、

「一刀……………あなたはこうなることが分かっていたの？」

「ん？ ああ、大体な」

俺は華琳の方を向いて事の詳細を話す。

「俺が最初に疑問に思ったのは華琳と同様の帳簿だ。けどそこで俺は思ったんだ……これは失態じゃなく自分売り込むための布石じゃないかと」

「へえ」

「んで、少し荀文若にカマを掛けてみたらそうだったってわけ。：

……名前に聞き覚えがあったしな」

「何て？」

「いや、なんでもないよ」

あまり未来の知識をペラペラと喋るのは危険だと俺は思ったので、今回は詳細を濁す。

「後はそれから考えられることを考えたところなるだろうなあ、って思っただけにコイツも連れてきたわけだ」

「なんでそんな事がわかるのよ、この変態！」

「なんで変態！？」

俺は何もしてないだろ！？

「桂花、あまり一刀に酷いことを言っただけだよ。一刀は私が唯一認めた男なんだから」

「曹操さま！？」

あまりのことに驚く荀文若。

だから言っただけ？ 華琳の方から頼んだことだって。

「そうだな。私も認めているしな」

「姉者は一騎打ちにも負けていたしな」

「うう、秋蘭」

姉イジリが楽しくなったのか秋蘭はもつと春蘭をイジっている。

「そんな……………あの夏侯元讓を一騎打ちで破るなんて……………」

最早驚きを通り越してなんか呆れられてる感じがする。

「ということで桂花、一刀や春蘭達にも真名を教えてあげなさい」

「そんな!？」

「おいおい……………」

だから真名って大事なものじゃなかったのか？

これだけ簡単に扱っていいものなのか？

「曹操さま、それだけは!？」

「別にいいじゃない。私の真名も呼ばせてあげるから」

「うう~~~~」

華琳の真名を取るか俺に真名を教えるかで悩んでいる荀文若。

……………そんなに無理するなよ。

「それによ？ 春蘭を凌ぐ武にあなたに匹敵するほどの智を持つ人

物なんてこの国にいるかしら？」

「それは……………」

今の言葉がきっかけになったのか、荀文若は俺の方を向き、キッと睨むと、

「私の真名は桂花！ きやすく呼ばないでよね、変態！」

「だから俺は変態じゃ——まあ、今はいいか。俺も一応自己紹介しておく。北郷一刀だ。字と真名はないから好きに呼んでくれて結構」

「わかったわ、変態」

「それ以外の呼び方にしろ！」

## 12話

馬は、思ったよりもゆっくりと進んでいた。

予定期間の半分の行軍だというから、もっとペースを上げるものだ  
と思ったんだが……

いつもの行軍より、少し早い程度でしかない。

「北郷、大丈夫か？」

「ああ。大分慣れてきたからな……」

もうそろそろ騎馬戦くらいをこなせるレベルだ。

まあこれで春蘭と戦えなんて言われたらまだ無理だが。

「それにしても……アイツは大丈夫かな？」

「大丈夫だろう。華琳さまや姉者の前であんなに言い切ったのだから」

「お、噂をすれば……。おい、桂花」

俺は先ほどの問題児——桂花を発見したので呼んでみる。

呼んだ直後に振り返った桂花は、俺の顔を見ると嫌そうな顔をして  
いた。

「な………っ！ アンタ、何で………っ！」

「何でって……来る前のやり取りで真名で呼んでいいってことにな  
ったろ？」

「そうだったけど……覚える気にもならなかったわ！」

なんで俺はコイツにこんなに嫌われているんだ？  
ずっと思ってることだが、俺は何もしていないし。

「はあ……………」

「それに、古参の秋蘭はともかくとして、なんでアンタなんかに真名で呼ばれなくちゃならないのよ！ 私の大切な真名をあんたなんかに犯されてたまるもんですか！ 訂正なさい！」

犯すって、お前……………」

「そんなことより、作戦の方は大丈夫なのか？ 華琳は自分が言ったことは絶対に曲げないから、この行軍が失敗したらお前の首、飛ぶぞ？」

「そんなことじゃないわよ……………」

「華琳さまの命だ。諦めて受け入れるのだな」

まあ俺だつて嫌がつてるヤツの真名を無理やり呼ぶつてのは嫌なんだが……………呼ばないと華琳が怒るし……………」

「で、なんですって？」

あ。諦めた。

「だから、今回の作戦」

「別にアンタなんかに心配されなくてもキツチリこなしてみせるわよ！ 大体今の華琳さまの軍の実力なら、本当は私の策がなくてもこなせて当り前なんだから」

「……………へえ」

流石だな。

ここに来て日も浅いつてのに、ちゃんと見てるな。

「華琳さまは知も勇にも優れたお方だが、それを頼んで無茶な攻めを強いるお方ではないからな……。正直、こういう強行軍を実戦で試すのは初めてだ」

思ったより華琳って慎重派なんだな。

まあ春春蘭がいるからちょうどいいバランスにでもなってるか？

「ここしばらくの訓練や討伐の報告書と、今回の兵数を把握した上での計算よ。それでも余裕を持たせてあるのだから、安心なさいな」  
なんで糧食の監督官だったヤツがそんなこと知ってるんだ？

「まあお前の知は皆が認めてるから大丈夫だろ」

「な……………っ!？」

ん？　なんで桂花の顔が赤いんだ？

まあ気にしないでおこう。

「そっぴや秋蘭、軍師の募集ってしてなかったのか？　してたらコイツのこんな無茶なんかなかったのに」

今まで疑問だったことを秋蘭に聞いてみる。

この時期の華琳なら募集していてもおかしくはないはずなのに。

「うむ。軍師の募集はしていなかった」

「試験官、あなただったものね」

いつのまにか顔の赤みが引いた桂花が秋蘭に言う。

「そうだったのか……………」

武官をやったり文官をやったり、新人の面接官をやったり……秋蘭が一番働いてるんじゃない？

「経歴を偽って申告する輩も多いのでな。個の武勇なら姉者やお前が揉んでやればだいたい分かるのだが……文館はよほど名の通った輩でない限り、使ってみないと判断がつかん」

「だから、一刻も早く華琳さまの目に留まる働きをして、召し上げていただくと思ったのだけれど……その機が思ったより早く来て、良かったわ」

「へえ……お前も頑張ってるだな」

俺はそんな桂花の頭を撫でる。

「ちよつ！？ 何するのよ、この変態！」

「おっと、ごめんごめん。つい癖だな」

怒れる桂花を宥めながら対応する。

そんな折に少し急ぎ気味の春蘭がやってきた。

「おお、貴様ら、こんな所にいたか」

「どうした、姉者。急ぎか？」

「うむ。前方に何やら大人数の集団がいるらしい。華琳さまが呼びだ。すぐに来い」

そんなに急ぎの用事か。

俺は桂花を撫でるのをやめ、華琳のところに向かおうとする。

「あつ……」

「ん？ どうした、桂花？」

「べ、別になんでもないわよ、この変態！」

「だから変態って言うのをやめろって言ってるだろ！」

「お前ら……………そんな漫談はいいから早く来い……………」

呆れ気味な秋蘭の声で我に返った俺と桂花は駆けだす。

これはまた華琳に怒られるかな？

「……………遅くなりました」

「ちょうど偵察が帰ってきた所よ。報告を」

「はっ！ 行軍中の前方集団は、数十人ほど。旗がないため所属は不明ですが、格好がまちまちな所から、どこかの野盗か山賊だと思われるます」

野盗か山賊ねえ……………

「……………様子を見るべきかしら」

「もう一度、偵察隊を出しましょう。春蘭、北郷、あなた達が指揮を執って」

「おう」

「俺もか？」

別に春蘭だけでも良い気がするが……………なるほど。

「春蘭の暴走を止めるための綱役かよ」

「その通りよ。分かったんならさっさと行きなさい！」

「おい、北郷！ 何を納得している！ それではまるで、私が敵と見ればすぐに突撃するようではないか！」

「違うの？」

「違うのか？」

「違うないでしょう？」

「華琳さままでえ………」

集中砲火をくらった春蘭はほっておいて、俺達は話を進める。

「私も出ると、こちらが手薄になりすぎる。それにもし戦闘になった場合も姉者や北郷の方が適任。………そういう判断だな、桂花」「そうよ」

話しは全て纏まった。そこに華琳の一声。

「行ってくれるでしょう？ 一刀、春蘭」

「はっ！ 承知いたしましたー！」

「ま、そういうことなら真面目に働きますか」

俺は溜息をつきながら答える。

「では春蘭、一刀。すぐに出撃なさい」

春蘭の部隊をまるまる偵察部隊に割り振って、俺達は華琳の本隊から離れ、先行いて移動を始めた。

……俺の部隊？ そんなものないに決まってるだろ。まだこっちにきて日も浅いから兵を任されてないんだよ。

「まったく。先行部隊の指揮など、私一人で十分だというのに……」

「偵察も兼ねてるからな。通りすがりの傭兵部隊とかだったら、突っ込むなよ？」

「貴様なんぞに言われるまでもないわ。そこまで私も迂闊ではないぞ」

ホントかよ……………

「夏侯惇さま！ 見えました！」

「ご苦労！」

「あれか。ん？ なんか、行軍してる感じじゃないな……………」

俺は前方に見える山賊紛いの集団を見て呟く。

それは春蘭も思ったようだ。

それを証拠に向こうに見える集団は一か所に留まって、何やら騒いでるように見える。

…………酒盛りって感じでもないしなあ。

「何かと戦っているようだな」

なるほど。あれは戦っていたのか。

あ。なんか飛んだ。

布袋みたいな大きな塊から、細い棒らしきものが四本と、一抱えほどの塊がひとつつつついていて――

「……………って、人かよっ！？」

なんて出鱈目な！

人間が吹き飛ぶってどんな力だよ！

「なんだ、あれは！」

「誰かが戦っているようです！ その数……一人！ それも子供の様子！」

マジか！？ 子供があそこまで人を吹き飛ばせるものなの！？  
なんなんだ、この世界は！

「なんだと！？」

その報告を聞くが早いか、春蘭は馬に鞭を振り、一気に加速させていく。

「おい、春蘭っ！ チッ！」

遠くになっていく春蘭に舌打ち一つ。

「そこのお前！」

「はっ！」

俺は近くにいた兵士に命令する。

「俺はこのまま春蘭を追って子供を救出する。そのため本隊の方に伝令を頼む。後、俺と春蘭が前方の集団と戦闘に入る、その時に何人かの山賊紛いを逃がすからそれを追いかける偵察部隊の準備を頼めるか？」

「任せてください！」

「頼んだぞ！」

俺はそう告げると、馬に鞭を振り春蘭のもとに駆けつける。

（たくっ！ 誰だよ。さっきはそこまで迂闊じゃないって言ったのは……………）

「でえええええいつ！」

「ぐはあっ！」

少女は自分の武器である鉄球を振り回し賊を吹き飛ばす。  
その力は怪力で、いとも簡単に人間を空高くに飛ばす。

「まだまだあっ！ でやああああああっ！」

「がは……………っ！」

「ええい、テメェら、ガキ一人に何を手こずって！ 数でいけ、数で！」

賊のリーダー格は人数で攻めるように命令する。  
それに従う賊達は少女を囲み始めた。

「おおおお！」

「はあ……………はあ……………はあ……………。もう、こんなにたくさん……………多すぎるよう……………！」  
「ぐふうっ！」

どこからともなく大剣が現れ、少女を囲っていた賊を斬りつける。

「……………え？」

「だらああああっ！」

「げふうっ！」

その大剣の持ち主は春蘭だった。

春蘭は少女に近寄り、

「大丈夫か！ 勇敢な少女よ！」

「え……………？ あ……………はいっ！」

「貴様らあつ！ 子供一人によつてたかつたって……………卑怯というにも生温いわ！ でやあああああっ！」

春蘭は気合いとともに敵を斬りつける。

その一太刀で数人の賊達が絶命する。

「うわあ……………っ！ 退却！ 退却——っ！」

「逃がすか！ 全員、叩き斬ってくれるわ！」

「はあ……………春蘭！」

俺は賊を追いかけようとする春蘭を引き留める。

案の定、春蘭は「何故止める！」って感じで俺を睨んでくる。

「お前なあ……………俺達の仕事は偵察だぞ。その子を助けるために戦うのはいいとして、敵を全滅させる事が目的じゃない！」

「ふんっ。敵の戦力を削って何が悪い！」

「それも尤もだけだな。今は他にすべき事があるだろ？」

「……………例えばなんだ！」

コイツ何したらいいか絶対分かってないだろ……

「逃がした敵をばれないように追跡して、敵の本拠地を掴むとかだな……」

「……おお。それは良い考えだな。誰か、おい、誰かおらんか！」

「……もう何人が偵察に出したよ」

俺は少し疲れ気味に春蘭に告げる。

「むうう、流石だな」

「はあ……」

これがホントに、俺と双壁の最強戦力なんだよなあ。

武勇は確かに敵なしなんだが……誰かを手綱に付けると言った桂花の判断、見事としか言いようがない。

「あ、あの……」

俺と春蘭が話し合っていると少女が控えめに話しかけてきた。

「おお、怪我はないか？ 少女よ」

「はいっ。ありがとうございます！ おかげで助かりました！」

ああ……ウチにはいないタイプの人間だなあ。

なんか周りが周りなせいで純粋な人間を見ると心が洗われるような感じがする。

「？ どうしたの？」

「いや、なんでもない」

少女が不思議そうにコチヲを覗いてくるので何でもないと咄嗟に言う。

「それは何よりだ。しかし、なぜこんな所で一人で戦っていたのだ？」

「はい、それは――」

女の子がそんな話をしようとすると、向こうから本隊がやって来た。

「来たか。ここだ！ 華琳ーっ！」

「…………っ！」

ん？ なんだがこの少女の気が変わった？

「一刀。謎の集団とやらはどうしたの？ 戦闘があったという報告は聞いたけれど…………」

「やつこさんらは春蘭の勢いに負けて逃げた。何人かに尾行してもらってるから、本拠地の確定までに時間はかからないだろう」

俺はさっきの兵士に言ったことを華琳に報告する。

そんな俺の判断に華琳は気を良くしたらしい。

「あら。なかなか気が利くわね」

「お褒めに預かり光栄の至り……………だな」

俺もそんな華琳に気を良くして少しおちやらけた感じで返す。  
そんなやり取りの間に少女は入ってきた。

「あ、あなた……………！」

「ん？ この子は？」

「お姉さん、もしかして、国の軍隊……っ！？」

「まあ、そうなるが……ぐっ！」

「な……っ！？」

いきなり少女が春蘭に攻撃を仕掛けた。

流石の俺も行動が出来なかった。

「き、貴様、何をつ！」

「国の軍隊なんか信用できるもんか！ ボク達を守ってくれないくせに税金ばかり持っていつて！ てやあああああっ！」

「……くうっ！」

あれは不味い……

「だからお前は一人で戦っていたのか……？」

「そうだよ！ ボクが邑で一番強いから、ボクが皆を守らなきゃいけないんだっ！ 盗人からも、お前達……役人からもっ！」

「くっ！ こ、こやつ……なかなか……っ！」

チイツ！ 流石に相手を本気で倒そうとしているヤツと、どうしたらいいかわからないヤツとじゃ戦闘の結果なんてわかりきっている。このままじゃ春蘭がやられる……俺が割り込むかつ！

そう考え割り込むとした瞬間、華琳の声で時が止まった。

「二人とも、そこまでよ！」

「え……っ！」

春蘭と少女は華琳の声が発せられた瞬間、体がピクンと動きその行動を停止した。

「剣を引きなさい！ その娘も、春蘭も！」  
「は……………はいっ！」

その場に歩いてくる華琳の気迫にあてられて、女の子は軽々と振り回していた鉄球を、その場に取り落とした。

ドスンッ！

「……………」

……………おいおい。地面がなんか、陥没してんだけど。  
どつという重さの武器なんだ、あれ。

「……………春蘭。この子の名は？」  
「え、あ……………」

そついやその子の名前を聞くの忘れてたな。  
俺も名乗ってないし。

「き……………許緒と言います」

何！？ ここに来て許緒と来るか。

まああの怪力なら許緒と言って通じるだろうな。

しかし許緒もこういう威圧感のある相手を前にするのは初めてなんだろう。

完全に華琳の空気に吞まれきっている。

「そつ……………」

そして、華琳が取った行動は――

「許緒、ごめんなさい」

「……………え？」

許緒に頭を下げる事だった。

「華琳、さま……………？」

「何……………」

「……………」

俺はその光景を無言で見守る。

（霸王とは簡単に頭を下げてはならない……………しかし、頭を下げて謝らなくてはならない時に頭を下げてなくてはただの傲慢だ。その見極めが出来てこそその霸王なんだが……………流石だな）

「あ、あの……………っ！」

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの陳留の街で、刺史をしている者よ」

「山向こうの……………？ あ……………それじゃっ！？ ご、ごめんなさい！」

急に謝りだす許緒。

そうしたんだ？ 一体。

「な……………？」

「山向こうの街の噂は聞いています！ 向こうの刺史さまはすぐ立派な人で、悪い事はしないし、税金も安くなっただし、盗賊も凄く少なくなっただけ！ そんな人に、ボク……………ボク……………！」

なるほど……

ここは華琳の管轄じゃなかったのか。

それならさっきの許緒の行動も納得出来るな。

この時代の刺史のほとんどは自分の私腹を肥やすのに必死で、民のことなんか一切無視していただろうからな。

許緒にとっても刺史とは許すべきではない相手なんだろう。

それに比べて華琳はそんなことを一切していないことを知っていたからちゃんと謝ったのだろう。

「構わないわよ。今の国が腐敗しているのは、刺史の私が一番よく知ってるもの。官と聞いて許緒が憤るのも、当り前の話だわ」

「で、でも……」

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないかしら？」

ここで勧誘するか。他のタイミング——いやこれが一番良いタイミングなんだろう。

「え………？　ボクの、力を………？」

案の定、許緒は困惑している。

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。だから………村の皆を守るために振るったあなたの力と勇氣。この私に貸して欲しい」

「曹操さまが、王に………？」

「ええ」

そこまで断言しているところを見ると、呆れるやり感心する。

……まあ、俺はのために刀を振るうんだけどな。

「あ……あの……。曹操さまが王様になったら……。ボク達の村も守ってくれますか？ 盗賊も、やつつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでなく……。この大陸の皆がそうして暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……。皆が……」

そんな光景が許緒の頭の中に浮かんだんだろう。  
次第に顔が綻んでくる。

「華琳さま、偵察の兵が戻りました！ 盗賊団の本拠地は、すぐそこです！」

「判ったわ。……。ねえ、許緒」

「は、はいっ！」

「まず、あなたの村を脅かす盗賊団を根絶やしにするわ。まずそこだけでいい、あなたの力を貸してくれるかしら？」

「はい！ それなら、いくらでも！」

話は決まった。

「ふふっ、ありがとう……。春蘭、秋蘭。許緒はひとまず、あなた達の下に付ける。分からないことは教えてあげなさい」

「はっ」

「了解です！」

春蘭も秋蘭も了承した。

「あ、あの……。夏侯惇、さま……」

許緒は先ほどの事を気にしているらしい。  
そこまで気にしなくてもいいだろうに。  
それを証拠に春蘭は――

「ああ。さっきの事なら気にせんで良い。……………それより、その力、その力を華琳さまのためにしっかり役立ててくれよ？」  
「は……………はいっ！」

やっぱりな。

許緒もそんな春蘭の性格を理解したのか、元気な声で返事をする。

「……………では、総員、行軍を再開するわ！ 騎乗！」  
「総員！ 騎乗！ 騎乗っ！」

そして俺達は目的地である盗賊に本拠地に向かう。

### 13話

盗賊団の砦は、山の影に隠れるようにひっそりと建てられていた。許緒と出会った所からそんなに離れてはなかったけど……こんな分かりにくい所じゃ、よっぽど上手く探さないよ見つからなかったに違いない。

「こんな所にあつたのか……」

もちろん近づくとすぐに見つかってしまうので、砦はまだ豆粒ほどの大きさでしかない。

「許緒、この辺りに他の盗賊団はいるの？」

「いえ。この辺りにはあいっすらしかいませんから、曹操さまが探している盗賊団っていうのも、あいっらだと思えます」

許緒は自分の考えを述べる。

その情報を聞き、華琳は思考する。

「敵の数は把握出来ている？」

「はい。およそ三千との報告がありました」

「我々の隊が千と少しだから、三倍ほどか……。思ったより、大人数だな」

「もっとも連中は、集まっているだけの烏合の衆。統率もなく、訓練もされておりませんゆえ……。我々の敵ではありません」

桂花は華琳にそのように報告する。

しかし華琳は相手を挑発するような笑みで、

「けれど、策はあるのでしょうか？ 糧食の件、忘れてはいないわよ」

「無論です。兵を損なわず、より戦闘時間を短縮させるための策、既に私の胸の内に」

「説明なさい」

華琳はそのことを聞くとすぐに説明させた。

「まずは華琳さまは少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。その間に春蘭・秋蘭の両名は、残りの兵を率いて後方の崖に待機。本隊が銅鑼を鳴らし、盛大に攻撃の準備を匂わせれば、その誘いに乗った敵は必ずや外に出てくる事でしょう。その後は華琳さまは兵を退き、十分に砦から引き離れたところで――」

「私と姉者で、敵を背後から叩くわけか」

「ええ」

なるほど……その策なら大分の時間短縮になるだろう。

そう皆が思っているところで、仲間の内の『愛すべき馬鹿』の称号を持つ者が反発した。

「ちょっと待て。それは何か？ 華琳さまに咄をしると、そういうわけか！」

「そうなるわね」

「何か問題が？」

桂花はさも当然のように聞き返した。  
俺も何も問題はないと思うんだが。

「大ありだ！ 華琳さまにそんな危険なことをさせるわけにはいかん！」

「なら、あなたには他に何か有効な作戦があるとでも言うの？」

「烏合の衆なら、正面から叩き潰せば良からう」

「……………」

「……………」

全員が啞然とした表情で春蘭を見る。

春蘭の方はフンツ、とした感じで俺達を見ている。

「春蘭……………お前、やっぱり馬鹿だったんだな」

「油断した所に伏兵が現れれば、相手は大きく混乱するわ。混乱した烏合の衆はより倒しやすくなる。華琳さまの貴重な時間と、もっと貴重な兵の損失を最小限にするなら、一番の良作だと思うのだけれど？」

「な、なら、その誘いに乗らなければ？」

「……………ふっ」

「な、なんだ！ その馬鹿にしたような……………っ！」

春蘭……………それは馬鹿にしたようなじゃなくて、馬鹿にしてるんだ、きつと。

「華琳さま。相手は志も持たず、武を役立てることもせず、盗賊に身をやつすような単純な連中です。間違いなく、春蘭よりも容易く挑発に乗ってくるものかと……………」

「……………な、ななな……………なんだとおー！」

「桂花。その誘いを乗ってこなかった時の対策は？」

「ふんっ！ あなたに言われなくても考えているわ」

「はいどうどう。春蘭。あなたの負けよ」

「俺もそう思う。今回は桂花の策に乗っておけ」

今回は完全に桂花の勝ちだ。

それに流石は荀文若だな。第一の策だけでなく、その策が失敗した

場合の第二の策を考えているとはな。

「か、華琳さまぁ……………」

「桂花、事前の策の説明をお願い」

「はっ。この近辺で拠点になりそうな城の見取り図は、既に揃えてあります。あの城の見取り図も確認済みですので……………万一こちらの誘いに乗らなかった場合は、城を射ちから攻め落とします」

淡々と述べていく桂花を尻目に見ながら俺はこれからのことを思っていた。

「分かったわ。なら、この策で行きましょう」

「華琳さまっ！」

俺は春蘭の声で我に返った。

……………コイツまだこんな事言ってたのかよ。

「お前なぁ……………これでけ勝てる要素の揃った戦いで、図の一つも出来ないようじゃ……………この先やってけないだろ？」

「一刀の言っ通りよ、春蘭」

「変態の言っ通りって気に食わないけど……………華琳さま、ただ賊を討伐した程度では、誰の記憶にも残りません。ですが、最小の損失で最高の戦果を上げたとなれば曹孟徳の名は天下に広まりましょう」

俺、華琳、桂花に言われ、流石の春蘭も堪えていた。

これで諦めるかと思ったがそこは春蘭、せめてと思い桂花に提案した。

「な、ならば……………せめて、華琳さまの護衛として、本隊に北郷と許緒はを付けさせてもらおう！それでもダメか？」

「北郷と許緒は貴重な戦力よ。伏兵の戦力が下がるのは好ましく無いのだけれど……………」

「私が北郷と許緒の分まで暴れれば、戦力は同じだ。それで文句は無かるう」

俺は春蘭を見つめる。

そこには、それくらい簡単だ。とても言いたげな春蘭の顔が見て取れた。

「……………分かったわよ。なら、四部隊は華琳さまと北郷、私、許緒、伏兵は秋蘭と春蘭。これでよろしいでしょうか、華琳さま」

「それで行きましょう」

そして華琳はすぐに周りに命令する。

そして数分後、作戦は開始される。

「では作戦を開始する！ 各員持ち場につけ！」

そんな中、俺は一つの不安と戦っていた。

春蘭達の隊が離れていく。

これで、こちらの手勢は本当に数えるほど。

まあ俺と華琳、許緒がいれば別の問題はない。

「あ、兄ちゃん。どうしたの？」

「ん？ …………… ああ、許緒ちゃんか」

俺はトコトコと近づいてくる許緒に話しかける。

「季衣でいいよー。春蘭さまと秋蘭さまも、真名で呼んで良いって言ってくれたし」

「そうか？ …………… 所謂いえば、こつちで華琳の護衛をする事になったんだつたな」

「うん。たいやく、なんだつてさ」

「そうだな。何せ、華琳を守る仕事だからな」

「そつか…………。たいやく、かあ…………。うう、なんか、緊張してきちゃった…………」

「大丈夫だつて。いざとなったら俺が助けてやるよ」

俺はワシヤワシヤと季衣を撫でる。

その事に季衣はよろこんでくれた。

「所謂いえば、兄ちゃん強いのか？ あんまり強そうには見えないけど…………」

「失礼なやつだなあ。それでも俺は春蘭より強いんだぞ？」

「ホント！？」

「ああ、ホントだ」

季衣は俺の言葉にビックリしている。

「兄ちゃん、あの春蘭さまより強いんだあー」

「ああ強いぞ。一騎打ちで倒したからな」

俺はそんな話を話しながらさっきから不安に思っていることを口に出していた。

「……………これから殺し合いが始まるんだよな」  
「兄ちゃん？」

俺は人は殺したことは……………ある。

けどあの時は自我を保っていないく、狂乱状態でした事だからあまり覚えていない。

それでも少しだけ覚えている。

人を斬り殺したあの感触を。

斬りつけた相手の断末魔を。

泣き叫びながら命乞いをする人の声を。

「ボクも最初は人を殺すのは嫌だったんだ……………」  
「季衣？」

季衣は語る。それは俺のためか、それとも……………

「それでもね？ 敵はやってくるんだ。盗賊、山賊とかいろいろ。  
その敵はボク達の仲間を殺していくんだ。ボク達は何も悪いことし  
てないのに。そして思うんだ、『この敵をボクが殺さなくちゃボク  
の仲間が殺される』って。だからボクは敵を殺す……………」

季衣の独白は続く。

それは俺が決断しなくてはいけないことを季衣に決断させているよ  
うで不快だった。

「季衣…………… もういい、もういいんだ」  
「兄ちゃん……………」

俺はいつのまにか季衣を抱きしめていた。  
抱きしめながら俺は…………… 誓った。

俺は今から人を殺す……………

それは私利私欲ためじゃない………

こんな優しい少女にこんな思いをさせないために………

俺の主が修羅の道を突き進むために………

でも、いくら綺麗事を言ったって、人殺しは人殺しだ……

だから俺は誓う。

俺は人を殺すことに溺れないと。

――俺は自分が殺した人間を悪と決めつけ自分を正義と決めつけ、その覚悟を背負っていく

「そろそろ作戦が始まるころだな……………行くか、季衣！」  
「……………うん、兄ちゃん！」

俺は抱きしめていた手を緩め、季衣を立たせる。そして二人で華琳達がいるところに歩いていく。俺はここで覚悟を決め、誓いを立てた。ならその誓いを死ぬまで掲げよう。

この“北郷一刀”という存在が死ぬその時まで。

## 14話

戦いの野に、激しい銅鑼の音が響き渡る。

「……………」

響き渡る……………」

「……………」

響き……………」

「……………」

……………」響き渡る銅鑼の音は、こちらの軍のもの。  
でも響き渡る咆哮は、城門を開けて飛び出してきた盗賊達のもの。

「……………」桂花

「……………」何よ？」

「……………」これも作戦か？」

「……………」流石の私もこれは想定外だったわよ」

「……………」だよなあ」

俺は呆れながら飛び出してくる盗賊達を見る。

……………」これは本当に春蘭より馬鹿だな。

春蘭でも敵の銅鑼を味方の銅鑼だと思って突っ込んでこないしな。

「連中、今の銅鑼を出撃の合図と勘違いしているのかしら？」

「多分そうだろうなあ……………」

「……………そう」

「どうした？ ああ。華琳、挑発の言葉とか、用意していたのか？」  
確かこの時代の戦じゃ、そういう舌戦を戦う前にあったんだっけ。

「……………一応、こういう時の礼儀ですからね。まあ大した内容ではないから、次の賊討伐の時にでも使うことにするわ」

「そうすることが、賢明だな」

俺は華琳にそう告げて笑い合った直後、季衣が駆けよってきた。  
そう言われ、俺は敵の方に目を向ける。

おお……………少人数のこっちに比べて、相手はハンパなく多い。  
もしかして、これって全軍か……………？

「ふむ……………まあいいわ。多少のズレはあったけれど、こちらは  
予定通りにするまで。総員、敵の攻撃を適当にいなして、後退する  
わよー！」

華琳の号令とともに本隊は後退する。

これで俺達は後、春蘭達の奇襲が成功するまでいなすだけだ。

「それにしても……………遅いなあ」

「そんな事言っても仕方ないでしょ？」

俺は春蘭達の奇襲が遅いことを心配していた。

華琳も口ではあんなことを言っているが、少し心配しているようだ。

「まあどうせ春蘭のことだからこんな事になってるだろうさ」  
「どんな事？」

俺はやることがないので、華琳と軽口を叩き合う。  
そこに季衣と桂花も加わった。

『ふむ……。そろそろ頃合いかな』

『まだだ。横殴りでは、混乱の度合いが薄くなる』

『ま、まだか……。？』

『まだだ』

『もういいだろう！ もう！』

『まだだと言ってるに……。少し落ち着け、姉者』

『敵の殿だぞ！ もういいな！』

『うむ。遠慮なく言ってくれ』

『総員、突撃いいいいっ！』

「つてな感じに」

「あははっ。確かにそんな感じでしょね」

「兄ちゃん、おもしろーい」

「中々の想像力ね、北郷」

俺達四人は俺の想像していた春蘭達の光景で笑い合っていた。  
そんな中、待ち望んでいた報告が兵士によって知らされた。

「後方の崖から夏侯惇さまの旗と、矢の雨を確認！ 奇襲、成功です！」

「流石は秋蘭だな。こうも簡単に成功させるとは」

俺は感心しながら敵の後方に目をやる。

あの春蘭を制御しながら奇襲を仕掛けるなんぞ、普通の人間じゃ絶対無理だ。

「そうね。皆おしゃべりはそこまでにしなさい。この隙を突いて、一気に畳みかけるわよ」

「はっ！」

「季衣。あなたの武勇、期待させてもらっわね」

「分かりましたーっ」

俺はその言葉を聞き、身を引き締めるとそれ以上に身を硬直させる言葉を投げかけられた。

「一刀。あなたも季衣と同様に敵の殲滅に向かいなさい」

「……………何？」

「この様子だと私の危険もないだろうし、あなたが出てくれた方が時間も短縮できるもの」

「……………」

俺は沈黙した。

確かにさきほど覚悟はしたが、こつも早く人を“殺す”場面に出くわすとは。

だがあえて俺はここで決断する。

「……………わかった」

「期待してるわよ？」

「ああ、いくぞ、季衣！」

「うん、行こう、兄ちゃん！」

俺は駆けだし、季衣もそれに付いてくる。

それは俺の覚悟に対する試練なのかも知れない。

そんなことを思いながら俺は敵の方に駆けていた。

俺は季衣と、盗賊団がいるところに駆けだす。  
その途中、

「季衣！ 俺は右から盗賊を殲滅するから、左から頼めるか？」  
「まっかせてー！」

そうして俺は季衣と別れ、別々に盗賊団のもとへ駆ける。

（……………これで俺は“殺す覚悟”をしなくてはいけなくなつたな）

そう。俺はわざと季衣と別れた。

盗賊団を殲滅するなら季衣と一緒にいるほうが二人とも安全だ。  
けど俺は別れた。

（俺は今ここで“殺す覚悟”を決め、実行しなくてはならない）

無意識のうちに俺は白夜を握りしめ、身体は少し震えていた。  
手は汗ばみ、頭がズキズキと痛み始める。

（やれるのか？）

俺は心の中で自問自答する。  
いくら心の中で“覚悟”を決めたのだの、“誓つた”だのと言っても、  
それを実行出来なくては意味がない。

（やれるのか？　じゃない。やってみせる！）

もう一度だけ心の中で決意し、白夜を抜刀した。  
そしてとうとう――

最初の盗賊の集団が見えた。

「死ねや！　国の犬共が！」

「お前らが死ね！　この獣にも劣る存在め！」

仲間の兵士と盗賊達が罵り合い、戦い合う。

戦闘の錬度は圧倒的に仲間の方が上で、常時優勢な戦闘状態だった。  
そんな光景を俺は立ち止り見ていた。

（クソッ！　身体が言う事を効かないだと！　なんて無様な！）

俺は震えながらその戦いを見続けた。

そして初めて盗賊の死者が出る。

「ギャッ！」

「デメエ！　よくも仲間を！」

「うるせえ！　お前ら全員ここで死ぬんだよっ！」

怒号の中で戦いは続く。

そんな中、俺は戦いの中の死者を見て、想像してしまった。

（もし、今死んだのが華琳だったら……………）

そんな想像をしまい、汚物をぶちまけそうになる。が、俺は耐

えた。

気丈に戦線を見つめる。

（俺が戦わなかったら、華琳や春蘭があんな風になるかもしれない  
……）

俺はそう思い、物言わぬ死者を見た。

（そんな事耐えられるかつ！）

そして初めて俺は戦場を歩きだす。

その瞳は何かを恐れるのではなく、何かを決意した瞳だった。

人を“殺す”のが怖い？

———  
そんなの当たり前じゃねえか！

それなのになぜあなたは人を“殺す”の？

——もう二度と間違わないためだ！

何を間違ったの？

——俺が人を“殺す”のに怯え、そのせいで大切な人を失ってしまったことだ！

だから人を“殺す”の？

——そうだ！　もう俺は二度と迷わない！

そつだよ。何で俺は迷つてたんだよ。  
俺は“アイツ”が死んだ後に誓つたじゃねえか！  
星たちにも言つたことじゃねえか！

——大切な人を何がなんでも守ること。二度と大切な人を奪わせないこと。

——俺は大切な人を守るためなら何だってやる……  
…それこそ人を殺してでもな。

それなのに今さら、目の前で起きてるつてのに何震えてるんだよ！  
ふざけんじゃねえ！

「お前ら、新手が来たぞ。やっちまえ！」  
「！？ 北郷殿！」

俺は目の前からやって来る盗賊達を見据える。

（遅いつ！）

俺は白夜を先頭にいた盗賊に振るう。

その刃は相手の首を飛ばし、絶命させる。

俺は初めて“自覚”して人を殺した。

“自覚”して人を“殺した”という事実が俺に重くのしかかる。  
しかし――

（俺はこんなところで倒れる訳にはいかねんだよ！）

刀を振るう。

その度に盗賊達の命を奪っていく。

（俺は華琳達を守るために！）

一振り、二振りと。

（“アイツ”との約束を守るために！）

三振り、四振りと。

その行動を続け、ものの数分でさっきまでいた盗賊達が全て物言わない存在になった。

「よし！　ここはもう大丈夫だからお前らも他のやつらの所へ援軍  
に行け！」  
「はっ！」

俺の号令とともに兵士達が駆けだす。  
俺も盗賊が残っている場所に駆けだした。

（これで俺のもとの世界でいう人殺しという存在になったか……………）  
駆けながら思う。

（それでも…………俺はさっき立てた“誓い”を守って見せる）

その身体は初めのように震えてはいなく、いつも通りの状態だった。

（“約束”を守り“誓い”を守る……………か。守るものが多いな）

内心で苦笑しながらその重みを感じる。

その重みは決して嫌な重みじゃない。

（これが本当に“覚悟”を決めた、ってことなんだろうな）

その重みを感じながら、駆ける速度を上げる。

その顔にはもう何も迷いはなかった。

## 15話

「はああああああっ！」

「ガハッ！」

俺は戦線を駆けあがり中心地点辺りまで来たようだ。  
流石の中心地点だけあって盗賊の人数は桁違いに多い。  
それでもこちらの仲間は簡単には倒れない。

「大丈夫か！？」

「はっ！ ご助力ありがとうございます、北郷殿！」

フォローは出来る限りしているがそれでも間に合わない時もある。  
また一人仲間が倒れる。俺が見ただけではこれで三人目。

「カハッ……………」

「クソッ！」

そんな光景を見ながらも俺は白夜を振るい続ける。  
ここで俺が立ち止まったりしたら、その方が仲間が死ぬ確率が上がるかも知れない。

「それにしても盗賊の数が減ってる気がしないな……………」

「そうですね………… 確か敵の総人数は三千弱。こちらが千人弱くらいでしたか」

横にいた隊長格の兵士と話しながら戦況を見守る。

「奇襲でいくらか敵数を削りましたが、それでも良くて五百くら

いが限界でしょう。そして今は半刻くらい経ちましたから、残りは半数より少ないくらいの人数でしょうね」

「なるほど……………」

俺は隊長格の兵士の話を聞きながら考える。

（左の方は季衣に任してある……………後方は春蘭と秋蘭。前方は華琳と本隊が詰めてるから問題なし。ここは左から後方に向かう感じで迎撃でいいか）

考えを纏め隊長格の兵士に話しかける。

「俺は左から後方に向かうが……………ここは任せられるか？」

「大丈夫です。心置きなく行ってください、北郷殿」

「そうか、なら……………頼んだぞ！」

俺はそう告げるともう一度だけ戦況を見つめ、駆けだす。

少し走ると盗賊達の小さな集団を見つけた。

俺はその集団に突撃を仕掛ける。相手もこちらに気づいたのか迎撃を仕掛けてくる。

「おい！　どこかの馬鹿が単身で突っ込んでくるぞ、やっちなえ！」

その集団のリーダー的な大柄な男が叫ぶ。  
その叫びに盗賊の集団は俺に突撃してくる。

「そんなんじゃ俺は倒せねえよ」

「はあ？　何言……………っ……………て……………」

最後まで言い終わることなく集団の先頭の盗賊を切り捨てる。

その後が続く盗賊達も斬り刻んでいく。

一振りで数人——春蘭や季衣みたいな事は出来ないが、二人には出来ないやり方で俺は敵を殺していく。

俺のやり方は一振りで一人。しかし確実にその命を奪っていく。

そして鍛えに鍛えた身体能力と体捌きで一か所に留まらず、戦場を駆け続ける。

それはこの世界では到底考えられない戦い方。

——“異質”

故に敵味方が見入ってしまう。

それは何か神々しいモノを見つめている時の表情に似ている。

味方にとってそれは“戦神”

だが敵にとってそれは——

「う、うわあああああ！ 来るな、こっちに来るなあああああ

ああ！」

「うるさい……………」

泣き叫ぶ盗賊など無視し、敵を抹殺する。

「た、頼む！ 命だけは！！」

「……………」

先ほどいた集団はもう最後の一人になっていた。

「お願いだ！ 命だけ『お前はどうかした？』はっ？」

俺は命乞いする盗賊の声に被せ問いを掛ける。

「お前はそうやって命乞いする力無い人達に何をした？」

「そ、それは……………」

「お前はそんな事を無視して……嗤いながら殺したんだろう？ そんな人間が助かることが出来るとでも思ってるのか？」  
「へっ？」

そう言い残し、俺は盗賊に心臓に白夜を突き刺す。  
そんな光景を信じられないように眺める盗賊。

「こ……の……“悪魔”め……………」  
「……………」

最後の言葉を言い、絶命する。  
そんな盗賊を見詰め、

「“悪魔”……ね。初めて呼ばれた言い方だが、それは自分達だろう？」

俺は血振りをし、白夜を納刀する。

「自分達のことを何も考えないで相手だけを糾弾する……………こついた輩が一番嫌いな存在だな」

胸糞悪い感じがする。

「俺はこんなヤツらを“殺す”ことに怯えていたのか……………こんな人を人と思っていないヤツを！」

歯をギリツと鳴らしながら俺は耐える。

「信念を持った相手を“殺す”のは確かに辛い……………だがこんなヤツらなんか割いてやる感情なんか何一つないな」

最後に一言呟き、さらに奥へと俺は駆けだした。

「それじゃあな……………人の形をした“悪魔ども”……………」

中心地から大分と離れた場所。

「なんだ？ コイツら……………」

俺の目の前に突如現れた白装飾達の軍団。  
その数は百は下らないだろう。

「誰だ、お前達……………。盗賊じゃ……………ないよな？」

「諸悪の根源である、北郷一刀。悪を狩る信託はすでに下った。おとなしく死ぬがいい！」

「なっ！？」

いきなり手に持つ短剣で俺を斬りつけてきた。

俺はそれを受け流し、白夜で相手の腕を落とし、首を刈る。

そんな光景を見たにも関わらず、後ろにいた他の白装飾の軍団は俺に殺到する。

「いったい何なんだ！？」

俺は諸悪の根源？ どういうことだ？

「けどな……………俺もそう簡単に死ぬ訳にはいかないんだよっ！」  
「がはっ」

殺到する白装飾の軍団を斬り刻む。

一人で多数の人間を相手にする時は絶対に足を止めてはならない。  
もし足を止めたならそこでTHE ENDだ。

周りを囲まれて串刺しにされるだろう。

だから俺も足を止めずに戦場を走り回る。

「死ね！ 北郷一刀！」

「何で死ななくちゃならないんだよっ！」

もはや極致に達せられた体捌きで戦場を駆ける。

横薙ぎ、袈裟斬り、兜割――

一太刀も止まる事を知らない斬撃で相手を屠っていく。

「……悪に鉄鎚を！」

「うるせえ！」

十人単位で俺を囲もうとする連中を、俺は空へと跳び、斬り抜ける。  
戦力差は圧倒的……なのに、

（コイツら……恐怖心というものが無いのか……？）

仲間がいくら殺されても連中は俺に向かってくる。

それは洗脳の類のようにも思えてくる。

やがてその数も四分の一くらいになったところで白装飾の一人が口を開いた。

「なぜお前は死を拒む！？ お前は世界の悪だというのに！」

「意味がわからねえって言ってるだろうが！」

「意味なんてものはいらん！ “北郷一刀”という存在が悪だとい

うことは決まっているのだ！」

「そんな意味がわからん理由で死ねるかよっ！」

俺は口を開いていた最後の白装飾の胴を真っ二つにする。

「ガ……ハッ……。……北……郷……一刀……。……に……。……死を

……！」

「……………」

俺は最後の一人の死を見届け、白夜を納刀する。

「一体なんだったんだ……。……コイツら」

俺は胸の内に何か気持ち悪いものが入ってきたような感覚に陥るが無視する。

「俺が悪……。……か」

その言葉だけは俺の心の中へと響いてくる。  
けど響くだけであって、覚悟は揺るがない。

「俺が悪か……。……そうかもしれない。人殺しが正義なんてことは絶対にあるはずがないからな」

それでも――

「俺はこの道を突き進むだけだ……。……」

空を見上げる。

空はこんな血生臭い戦いをしているというのに、雲一つない快晴だ

った。

「さて……さっさとこんな戦いを終わらせるか」

俺は歩きだす。

この先に何かがあるかわからない。

それでも俺は――

「立ち止る気なんて……もうないんだよ」

一刀が去った後、木の陰から一人の青年が出現した。

「ふむ……やはり傀儡ではあの者は殺せませんか」

「当り前だろう……あれだけで殺せるならこの世界に来る前に死んでいる」

その言葉に反応し、もう一人の少年が現れた。

「それにしてもうれしそうですねえ、左慈」

「当り前だろう？ あいつと戦える日がだんだんと近づいてきているだからな」

左慈は残酷な笑みを浮かべ、もう一人の青年――于吉の方に向き直す。

「それでも時間で言えばまだまだまだかかりますよ？」

「何……あいつなら生き残るさ……」

左慈は于吉から目線を外し、先ほど一刀が去って行った方向を見る。

「はぁ……まあいいでしょう。私は次のための準備に向かいます  
が、左慈、あなたはどうしますか？」

「俺はもう少しここにいます」

「そうですか……ならくれぐれもバレないようにしてくださいね  
？」

「俺はそんなヘマをするか！ とつとと行け、于吉」  
「はいはい」

于吉はそう言い残すと光に包まれ、その場所から消えた。  
左慈もそれを見届けた後、光に包まれる。

「北郷一刀……この俺が唯一認めた人間……」

クックックと笑う左慈。

「于吉なんかの傀儡如きにやられるなよ？ お前を殺すのはこの俺  
だから……」

そして左慈もまた于吉と同じように消えた。

## 16話

「逃げる者は逃げる道を無理に塞ぐな！ 後方から追撃を掛ける、放っておけ！」

「……………それ、もつとタチが悪いな」

やっと華琳達がいる場所に戻ってこれた。

「正面からヘタに受け止めて、噛みつかれるよりはマシでしょう？」

「まあな……………」

早速コイツは軍師をしてるなあ。  
テキパキと指示をこなしてるし。

「華琳さま。ご無事でしたか」

「ご苦労さま、秋蘭。見事な働きだったわ」

お、秋蘭が返ってきた。  
ん？ 一緒にいるはずの春蘭がいないな。

「なあ秋蘭、春蘭は？」

「どうせ追撃したいだろうから、季衣に春蘭と追撃に行くよう、指示しておいたわ」

「……………見事なもんだ」

いくら春蘭がその方面で有名だからって、今回が顔を合わせるのも初めてで春蘭に指示するのも初めてなはずなのにそこまで出来るなんて……………

流石は王佐の才と呼ばれただけはあるな……………人間性はともかくと

して。

「……………何か、私に対して無礼なこと考えてたでしょ」  
「別に」

コイツ心を読んできやがった！

「桂花も見事な作戦だったわ。負傷者もほとんどいないようだし、上出来よ」

「あ……………ありがとうございます！」

！？ もの凄い笑顔だな、おい。

なんていうかもう、この世の最上級の笑みのような気がする。  
幸せ絶頂期みたいなの？

「それと……………一刀」

「ん？」

「……………」

なんだ？ 俺なんかしたっけ？

「流石だったわね」

「……………見てたのか？」

「ええ」

「そうか……………」

俺としてはアレをあんまり見られてるのはうれしくないんだが……  
その言葉で……………少しは救われる……………かな……………

「ふう……………」

ボタンッ！

「ち、ちよつと、一刀っ!？」

「やれやれ……。緊張の糸が切れたようすな」

「もういっそ、このまま捨てていったらどうですか!？」

「……………あれ？」

俺はいつのまにか馬の上で眠っていた。

確か華琳と話しをしてたはずなんだが…………

「やっと気が付いたか」

掛けられたのは、秋蘭の穏やかな声。

「……………城は？」

「とつくに陥としたぞ。その間、貴様はずっと眠りこけていたがな」  
「役立たずもここに極まれりね……………」

どうやら俺は華琳と話しをしている最中に気絶してしまっていたらしい。

あの時張り詰めていた緊張の糸が切れたのか…………

「スマン……………」

「はぁ……………」

「気にするな」

「華琳さまが庇わなかったらこんな奴……」

春蘭は呆れ、桂花はなんかブツブツ言ってるし……  
唯一励ましてくれたのは秋蘭だけかよ。

「まあそれは置いておいて……」

「あ、強引に話変えた!」

イヤイヤ、イイガカリデスヨ?

「それより……目が覚めたんだからこの縄、そろそろ解いてくれないか?」

そう、俺は馬の上にいるわけだが……  
縄でグルグル巻きにされた挙げ句、鞍の後ろにひょいと乗つけられているわけで。

「どうせ馬に乗れる体力なんか戻ってないでしょう? ついでだから、そのまま帰ったらどう?」

「もう戻ってるよ……」

これじゃなんか俺、文字通りにお荷物扱いじゃないか。

「まあなんにせよ……皆無事で良かった」

「ふんつ。あの程度で死ぬような軟弱者、我が軍にいるわけがなからう」

「気絶して荷物扱いされてるヤツはいるけどねー」

チクシヨー……

こんな時だけ優勢に出やがって！  
俺は一応今回が初陣だったんだぞ？  
そこをところを考えろよ。

「うるさい、このネコミミ頭巾」

「ふんだ。荷物みたいに積まれてる奴になに言われたって、怖くも何ともないわよ」

「ふふつ。今回は一刀の負けね」

そんな楽しそうな笑みを浮かべるなよ……………  
タクツ…………… まあ皆無事だからいつか。

「ただ、心残りなのは…………… 華琳さまが気にかけておられた古書が見つからなかった事だな」

「大変……………」

「春蘭！ 太平要術の書だよな？」

「う、うむ。そうだ、大変用心の書だな！」

「……………」

ええ……………

俺ちゃんとフォローしたよな？

「ま、まあ結局無かったのか？」

「無知な盗賊に薪にでもされたか、落城の時に燃え落ちたのか。…

……まあ、代わりに桂花と季衣という得がたい宝が手に入ったのだから、良しとしましょう」

「…………… そうか。季衣は華琳の所に残るのか」

俺は後ろでピコピコと馬に乗っている季衣に話しかける。

「うん！ それにボクの村も、華琳さまが治めてくれることになったんだ。だから今度はボクが、華琳さまを守るんだよ」

「ん？」

「この辺りを治めていた州牧が、盗賊に恐れをなして逃げ出したらしくてな。そこで華琳さまが州牧の任も引き継ぎ、この地を治めることになったのだ」

解説ありがとう、秋蘭。

「それに季衣には、今回の武功をもって華琳さまの親衛隊を任せることになった」

「そっか。季衣は華琳の親衛隊になったのか……………」

あれ？ 俺って何も仕事持つてなくね？

え？ もしかして二〇ト？

「そっか……………よかったな、季衣」

少し顔を引き攣りながら答える。

「これからよろしくね、兄ちゃん！」

「おう！」

これで荷物扱いされてなかったら、もっと格好良く兄ちゃんって呼ばれたんだろうけどな！

「さて。後は、桂花のことだけでも……………」

「……………はい」

桂花のこと？ 何かあったっけ？

……ああ！ 食料半分の件か。  
正直な話、今回の戦いで存分に力を振るってたから、もともと華琳の下にいる気がしてたな。

「桂花。最初にした約束、覚えているわよね？」  
「……………はい」

何か雲行きが怪しいな……………

「城を目の前にして言うのも何だけれど、私……………とてもお腹が空いているの。分かる？」

お腹が空いている？  
どういう事——まさか！？

「……………はい」  
「……………糧食が足らなかったのか」

おいおい……………  
しかも足らなかった理由って……………

「こっちの兵の損害が少なすぎて、兵が予想以上に残ったってところ……………」

「流石ね。現場を見ていないのに一瞬でその考えに至るなんて」

マジかよ……………

俺もあの時それについては危惧したけど……………

正直『んなことあるわけないか』ってな感じに流しちゃったな。

「ですが、華琳さま。一つだけ言わさせていただければ、それはこ

の季衣が……………」  
「にゃ？」

季衣が何かしたのか？

いや、今は桂花の援護に回るとするか。

ここでコイツを失うのは痛すぎるからな。

「まあまあ華琳。それはどう考えても不可抗力だろ？」

「不可抗力や予測できない事態が起こるのが、戦場の常よ。それを言い訳にするのは、適切な予測が出来ない、無能者のすることだと思っただけれど？」

なかなか痛い所を突いてくるな……………」

「そ、それはそうですが……………」

「……………」それでも、糧食を人の十倍食べる味方がいきなり加わるってのは、いくらなんでも常人の予想を超えてると思うぞ？ 流石の俺もそれは予想してなかったし」

そう。

季衣はあの小ささで、俺達の十倍以上の糧食を平らげたらしい。

まあ、あれだけのパワーの源になるって考えれば、妥当な計算なんだが……………」

ありえない……………」

まあ桂花のフォローをすれば、一応の誤差のために多めには持ってきたそうだ。

それでも季衣の胃袋には勝てなかった訳だが……………」

「え？ えっと……………」ボク、何か悪いこと、した？」

「いや、季衣は別に悪くない。気にするな」

確かに季衣は悪くない……………と思う。  
今回は少し間が悪かっただけさ。

「なあ、華琳」

「何かしら？」

さてコイツをここまで引つ張ってきたのは俺だ。

それなのにコイツが死ぬなんてことは目覚めが悪い。

そのために――

「コイツの帳簿を見て何も言わないで連れてきたのは俺だ。だから  
首を刎ねるなら俺にしてくれ」

「「「「「なっ！？」」「」「」」

皆啞然とした顔で俺を見てくる。

「ば、馬鹿じゃないの！？ あんたは何も関係ないでしょ！？ 華琳さまっ！ 今回の件は私の不始末です！ コイツは関係ありません。だから私の首を刎ねるなり、思うがままにしてくださいませ！」  
「駄目だって言ってるだろ？ お前は今後の華琳の覇業を進むために必要な人材なんだ。そんなヤツをこんなところで死なせるか」

「だからって何でアンタが！」

「それは連れてきたのが俺だからって言ってるだろ？」

そんな言葉の応酬が続けていたらとうとう華琳がキレ出した。

「いい加減にしなさいっ！」  
「っ！？」

いきなり華琳の覇気に当てられた俺と桂花は硬直する。  
周りの皆も同じようだ。

まあ俺は一瞬だけ硬直してすぐに解けたけど。

「大体なんで一刀が桂花の代わりに罪を被るって言うの？」  
「それは俺がコイツを連れてきたからに決まってるだろ？ 俺が連れてこなかったらこんなことにはなかったはずだ」  
「……………」

俺は華琳を真正面から睨む。

華琳も俺を真正面から睨み返してくる。

……………メチャクチャ怖え。

「……………はあ。桂花」  
「は、はい！」

「今回の遠征の功績を無視できないのは周知の事実。……………一刀に免じて、死刑を減刑して、おしおきだけで許してあげる」

「華琳さま……………っ！」

「華琳……………」

ふう……………助かったか。

場当たりだったけど、なんとかなるもんだな。

「あ……………ありがとうございます！ 華琳さまっ！」  
「ふふっ。なら、桂花は城に戻ったら、私の部屋に來なさい。たっぷり……………可愛がつてあげる」

「はい……………っ！」

何なんだ？ この桃色空間は……………

「……………むう」

「……………いいなあ」

華琳のおしおきが良い？

コイツら、まさか……………

「ねえねえ兄ちゃん。ボク、お腹すいたよー。何か食べに行こうよ  
う」

「それがいいか。片付けが終わったら、皆で何か食べに行くか」

まあコイツらが同性愛者だろうが俺には関係ないし。

それに俺はコイツらがどんなヤツだろうと守るって決めたしな。

「やったあ！ それじゃ、早く帰りましようっ！」

「ははは。こらこら、縄を引っ張るな、季衣」

この状態でその縄がほどけたら、落ちちゃうじゃないか。いくらなんでもこの高さで頭から落ちたら、流石の俺でも助からないぜ、H

A H A H A H A

「ほら、春蘭さまも早く早くー！」

「分かったというに。ほら、秋蘭も行くぞ」

「うむ」

春蘭と秋蘭は先に進んでいく。

俺はもしかしてこのまま結局帰るのか？

「一刀」

「なんだ？ 華琳」

「ごちそうになるわね？」

「なっ！？」

その言葉を残し華琳は桂花を連れて先に進む。

アイツ……顔には出していないけど、俺が桂花を助けたのに怒ってるな？

どうせ俺が助けなくても殺そうとしなかったくせに……

「まあいいか」

俺はそう無理やり思い込むとする。

それでもしてないとやってられないしな。

……ありゃ？ なんか縄が緩くなってきた気が……

「あ、解けちゃった」

……マジかよ。

ドスンッ！

……これが今回のオチだと言う……のか……チーン。

## 17話（前書き）

これでストックも底に突いてしまいましたorz  
また更新停滞になります。  
ご了承ください。

## 17話

「皆、遅いな……………」

指定された集合時間は、午後。

……………まあ、こんな時代だ。

何時何分集合っていう細かい集合時間が決まってるわけじゃないから、集まりが悪いのは当たり前といえば当たり前話なんだが。

「なんだ北郷、随分早いな」

お、春蘭がやって来た。後ろにいるのは桂花か。

「ああ、春蘭か。華琳と秋蘭は？ まだお昼か？」

「うむ、食事は済んだのだが……………なにか髪の纏まりが悪いとかでな。今、秋蘭に整えさせている」

「髪い？ あのくるくるか？」

あの髪って整えられるものなのか？

……………整えなくちゃ、ああはならないか。普通……………

あれが素っていうのはビックリだしな。

でも女の子がメイクに時間をかけるのは、今も昔も変わらないんだなあ……………

「……………あなた今、化粧や髪形なんて大して変わらない……………なんて思ったでしょ」

「いや、別にいゝ」

その手の話は“アッチ”の世界で散々言われたからなあ。

もうそれはぼろ糞に言われたよ、ホント……

「やれやれ。だから男は馬鹿だというのだ。州牧ともなったお方が、だらしない格好で公の前に出てみる。臣下たる我々どころか、主の品格まで疑われるわ」

「あら、珍しく意見が合ったじゃない」  
「当然だ」

いつも意見が食い違うのに華琳のことになると驚くくらい同じになるんだよな。

本当は気が合うんじゃないかと疑いたくなるよ……

それとも同属嫌悪っていうヤツか？

「別に悪いって言っていないから。っていうか、華琳が寝癖ぼさぼさで出てくる方が驚くぞ」

「華琳さまがそんな事をするもんか！」

「分かってるって言ってるだろ。……けど華琳も、今は刺史じゃなくて、陳留の州牧ってやつなんだな……」

俺が来てまだ一か月経ったたか経たないくらいなのに。

その昇進の理由は、あの戦いの後、その功績が朝廷に認められて、華琳は陳留の刺史から、さらに広い地域を治める州牧へと昇進した。慌ただしく引き継ぎや手続きを済ませて、ひと段落付いたのがつい先日。

落ち着いたのを機に、一度、皆でより賑やかになった街の様子を見て回ろう、って事になったんだが……

「何よ。何か問題でもあるの？」

「いや、特にないが……。けどそいう昇進？ ……って、すごく大変な事じゃないのか？」

地位が上に行くほど、それによる責任も生まれてくる。  
それが社会の常。

そんな事を知っている俺だからこそ、桂花達に聞いておきたい。

「華琳さまは既に陳留刺史としての十分な実績があるだろう。州牧など、ごく正当な評価……いや、むしろ低いくらいだ」

「そうか……」

それを聞いて安心した。

俺もまだ華琳と知りあってあまり時間が経ってないからな。そういう事はやっぱり多く時間を共にしている人とかに聞かないとわからない。

別に華琳を信用していないわけじゃないけど。

「当たり前だ。本来の州牧が逃亡した非常時でもあるしな。中央にもわざわざ人を選別して派遣するより、有能な華琳さまに任せよう、と思った見る目のある奴がいたのだろう」

「それに、中央にも知り合いは何人かいたしね」

「……………何？」

中央の知り合いって…………

華琳ベースの話じゃ、ないな。

「それって、桂花のコネって事か？」

「こね？」

「何をこねるつもりだ。麵でも打つ気か？」

おおっと…………コネじゃ伝わらないのか…………  
んじゃ…………何て言ったらいいんだ？

「ん……桂花が中央にいる知り合いに手回しして、華琳を州牧にしたって事か？」

言い回しがめんどくさいな。

「袁紹の所って、扱いは悪かったけど、中央との繋がりだけはたくさん作れたのよね」

「……それ、華琳が知ったら怒らないか？」

アイツこういう事は嫌いそうだしなあ。

「別に怒らないわよ」

「華琳さま……」

いきなり現れやがって……  
少しビビったじゃねえか。

「なりふり構ってられるほど、今の私達には力も余裕もないでしょう。使えるものなら天の国の知識でも部下の繋がりでも、遠慮なく使わせてもらおうわ」

息巻く華琳は……いつも通りだった。

あのくるくるも、いつも通り。

「……何？」

「いや、春蘭から髪の纏まりが悪いつて聞いたが……。あまり変わらないんだなあ、って」

「雨でも降るのかしらね？　いつもと違うようにしか纏まらなかったのよ。……どう？　あなたから見て変じゃないかしら？」

「あ……………ああ。大丈夫だ」

いつもの違いが分からないくらい、大丈夫だ。  
てか、これはどう見てもいつもと同じだろ！？    ところがどう違うんだよ！

「ならいいわ。それに、州牧になったおかげで季衣との約束を守ることが出来たわけだもの。言う事はないわね」

「そうか……………。ん？ そういや季衣は？」

街へは皆で行くって聞いたんだが……………いつも賑やかな、季衣の姿が見えない。

「今朝、山賊のアジトが分かったという報告が入ってな。討伐は私か姉者が出るから街を見て来いと言ったのだが、聞かなくてな」

「そうか……………」

「ああ。自分の村と同じ目に遭っている村を見ていられんのだろう。はりきって出掛けていったぞ」

はりきってか……………

身体を壊さなければいいんだけど……………

「んじゃ、お土産くらいは買って帰らないといけないな」

「なんだ、考えることは同じか……………」

春蘭も同じことを考えていたのかよ。

「あんたたち、観光に行くわけじゃないのよ？」

「視察はちゃんとやるよ。その上で季衣にお土産を買うつくらい、別にいいだろ？    な、華琳」

「仕事をちゃんとするならね」

流石、話が分かる人で。

「はいっ！」

「……………返事だけにならなければいいけど」

「そう言うなって……………。桂花にも何か買ってきてやろうか？」

「はあ？」

なんでそこで呆れ視線？

おいおい、なんで周りもそんな感じなんだ？

「あんた……………馬鹿なの？」

「なんでお土産を買ってきてやろうか、って聞いただけなのにそこまで言われなくちゃならないんだよ……………」

「それがおかしい事なんでしょうが！」

なんで俺こんな理不尽にキレられてるだよ……………

「はあ……………んじゃ買ってこなくていいのか？」

「！？　そ、それは……………」

ん？　なんで顔が赤くなって俯いてんだ？

もしかして苛めすぎて泣きそうとか？

うわっ！　それってヤバくね？

「わかったから……………ちゃんとお土産は買ってきてやるよ、な？」

ポンポンと頭を撫でる俺。

周りはなんか変な視線を送ってくるし……………

「う、うう……分かったからそろそろ手を除けなさいよ!」  
「おおっと、悪い悪い」

なんだか機嫌が直って良かった良かった。  
ん、季衣と桂花のお土産は何がいいだろうか。

「ま、まあなんにせよ皆揃ったのなら出掛けるわよ。桂花、留守番、よろしくお願いね」  
「はいっ!」

輝かしい笑み。  
さつきとは打って変わって………凄いな。

「それじゃ行きましょうか」

華琳一向は街へと向かうことになった。  
その歩みは悠々と――

「ホントなんなのよ、アイツは………」

私はさつきまで撫でられていた頭を触る。  
撫でられていたという事実を思い出した瞬間、なぜか顔が熱くなる。

「ホント………なんなのよ………」

「あれが陳留か……………」

陳留の外の荒野で一人の少女が呟く。

身体の所々にある傷から武人であることが分かる。

「やっと着いたー。凧ちゃん、もう疲れたの」

もう一人の少女が先ほどの少女——凧に不満をぶつける。

「いや、沙和……………これからが本番なんだが」

そんな少女——沙和に呆れる凧。

「もう竹カゴ売るの、めんどくさい。真桜ちゃんもめんどくさいよね……………」

沙和はもう一人いた隣の少女——真桜にも不満をぶつける。

「そうは言ってもなあ……………全部売れへんかったら、せつかくカゴ編んでくれた村の皆に合わせる顔がないやろ？」

「そうだぞ。せつかくこんな遠くの街まで来たのだから、皆で協力してだな……………」

凧と真桜は沙和を頑張つて諭そうとする。

沙和も根は優しい少女らしい。

言葉ではああ言っているが、

「うつうー……。わかったよお」

「最近は何んや、立派な州牧さまが来たとかで治安も良くなったみたいやし、いろんな所から人も来とるからな。気張って売り切らんと」

そんな言葉を聞いた沙和は、さつきとは打って変わって真面目な顔で提案する。

「……………そうだ。人が多い街なら、皆で手分けして売った方が良くないかな？」

「……………なるほど、それも一利あるな」

その提案に残りの二人も納得する。

しかしここで終わらないのがこの三人。

「それじゃ、三人で別れて一番売った奴が勝ちって事でええか？」

「負けたヤツは晩飯、オゴリやで！」

「こら真桜。貴重な路銀を……………」

やはり一番真面目そうな凧が反対する。

「分かったの」

しかし二人が相手となると分が悪くなるらしい。

「沙和まで……………」

「よっし。二対一で、可決ってことで！ 凧もそれでええやろ？」

「はあ……………やれやれ。仕方ないな」

「ほな決まり！」

「おーなのっ！」

結局は二人に押し切られ諦める風。

「……………なら、夕方には門の所に集合だぞ。解散！」

その言葉で一斉に散り散りになる三人。

ここに意地でも負けられない勝負が始まった。

## 17話（後書き）

次は夏頃にネギまの最新話を投稿出来たらいいなあ、と思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6327/>

---

真・恋姫†無双 ～乱世を駆ける鬼神～

2010年10月11日02時30分発行